



特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡 XI

昭和54年度
発掘調査
整備事業概報

福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所

は　じ　め　に

昭和54年度の発掘調査ならびに環境整備の事業も無事終了し、その報告書を発刊することになりました。事業の実施にあたり、御指導と御協力をいただきました文化庁、奈良国立文化財研究所、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査研究協議会、福井市教育委員会の関係各位および城戸ノ内町をはじめとする地元の皆様に心から感謝申し上げる次第でございます。

本年度も、新設県道予定地の発掘調査があり、文化庁の補助金による発掘は、下城戸道西と城戸の外濠にかぎられましたが、それなりに多くの成果をあげることができました。館近くの発掘地と同じように、小さな区画の屋敷跡や大きな越前焼甕据付穴群、街路の一部などが検出され、下城戸まで町並が続いていたことが推定できます。また城戸の外側には、幅10mの外濠が確認され、往時の城戸の防備はかなり堅固であったことがうかがわれます。

環境整備事業では、昨年度発掘調査いたしました武家屋敷跡を、それぞれの屋敷の大きさ、配置が分るように舗装材料などをかえて整備しました。なお環境整備事業で、八田七郎右エ門氏に委託、鳥類調査を行いました。今回その玉稿を頂戴いたしましたので、本報告書にあわせて掲載し一層内容を充実させることができました。厚くお礼申し上げます。

昭和55年3月

朝倉氏遺跡調査研究所所長

藤　原　武　二

目 次

はじめに	
第35次調査	1
その他の調査	9
環境整備	10
研究所要項	11
舗装遺構の調査	48
鳥類生息調査	57

P L. 1 ~ 8	第35次調査・遺構
P L. 9 ~ 14	第35次調査・遺物
P L. 15	第34次調査・遺構
P L. 16, 17	環境整備
P L. 18	平面図作成遺構写真
P L. 19	舗装遺構発掘地
P L. 20, 21	一乗谷の鳥類

第 1 図	発掘調査・環境整備位置図
第 2 図	第35次調査・遺構
第 3 図	第35次調査・全体遺構図
第4 ~ 12図	第35次調査・遺物
第 13 図	第34次調査・遺構
第 14 図	第29・30次武家屋敷跡整備図
第 15 図	遊歩道橋工・園路工図
第 16 図	舗装遺構実測平面図

第 35 次 調 査

今回の調査は福井市城戸の内町字下城戸道西の地、面積にして約1630㎡（内下城戸外濠の確認トレンチ調査の面積95㎡を含む）を対象に5月28日から8月29日の期間実施した。この地は、谷内の一番狭くなった所に築かれた下城戸の枡形をはいった所に位置しており、城戸内の幹線道路の検出とその付近の遺構の性格を把握することに調査の主眼があった。

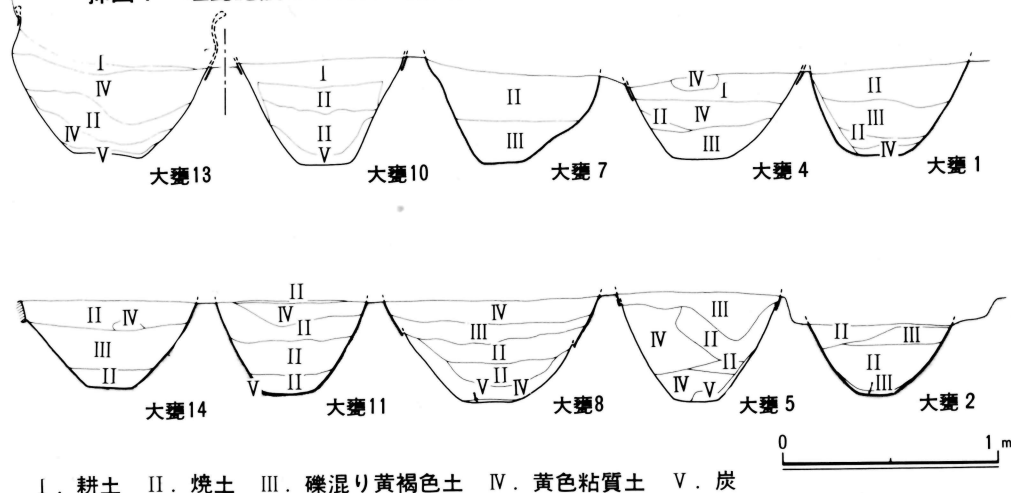
発掘された遺構 P L. 1～8 第1～3図

調査区南側の遺構の残存状態は良好であったが、北側のとくに山際と用水路付近では後世の攪乱のため、上層遺構はほとんど削平されていた。調査の結果検出した主な遺構は、道路1、建物7、井戸9、石積施設9、埋葬施設4、石組溝15、外濠1などである。以下、その概要を報告する。

S S 1340 調査区南端で、石組の側溝（S D 1367・1368）をもつ幅約5.5mの幹線道路を長さ約23m分検出した。道路は砂利面からみて3時期にわたってかさ上げ利用されたことがわかる。北側は、現在の道路と一乗谷川とによって削平されており、下城戸の枡形へのとり付き状態は不明である。南側は、ゆるくカーブして西の山際に向い、18次調査のS S 622、17次調査のS S 495・498につながるものと考えられる。

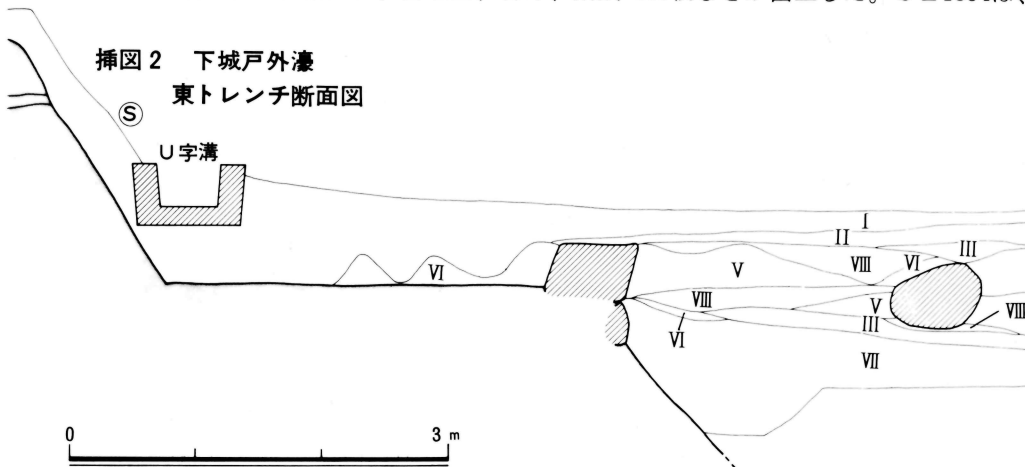
S B 1342～1348・1413 道路S S 1340に面して建てられた礎石建物S B 1342は、間口6.3m、奥行8.5mの規模をもつ。建物全面を焼土で整地しており、整地の焼土と廃絶時の焼土との区別は困難であった。建物の北東隅に井戸S E 1351と洗い場の石敷遺構S X 1392をそなえた土間があり、砂利敷面S X 1415から道路へ出入りしたものと思われる。建物の中央には炉状遺構S

挿図1 埋葬施設S X 1386の断面図



X1391がある。建物の南辺は幅 0.5m の 2 列の石列で、北辺は石組溝 S D1374 で区画されている。西辺には通路 S S1341 があり、屋敷裏の建物 S B1343 に通じている。礎石建物 S B1343 は、建物 S B1342 の附属建物で主屋と 14 度の振れをもって建てられている。敷地が山と川とで規制された結果であろう。南北 5.4m、東西 3m の規模と考えられその建物内全面に 15 個の大甕 S X1386 が 5 × 3 列に据えられていた。8 号甕からは青白磁の紅皿 3、15 号甕からは白磁皿、染付の見込み部に魚型の粘土板をおいた皿 7 等が出土した。建物 S B1342 の南にも石組溝に囲まれた不整形の区画が 2 個所にみられ、礎石や柱穴がうまく並ばないが建物の存在は推定できる。礎石建物 S B1344 は、東を道路で削平された南北 6.4m、東西 7m を測る建物である。この建物の北西部には 2m × 1.4m の規模の掘立柱建物 S B1345 があり、井戸 S E1353 の附属建物と考えられる。礎石建物 S B1346 は、28 個の大甕が据えられた埋甕施設 S X1388 を覆うための建物で、南北 9.3m、東西 7.5m の規模を測る。のちに、この建物は南北 9.5m、東西 7.5m に新しく作りかえられている。埋甕施設は、焼土でうめられていたが、その用途や性格は不明である。5 × 6 列に大甕を据えてあることから、大甕の口縁直上に大甕の口径よりわずかに小さな穴をあけた床を張り、その上で作業したと考えられる。礎石建物 S B1348 や S B1413 は、礎石が抜かれていたり削平されていてその規模は不明である。

S E1349～1357 井戸は 9 基検出した。全て石積みで、ガラ石や焼土で埋められていた。石組のしっかりした 5 基を掘った結果、深さは 2.7m から 3.3m あり、上面径は 0.8m、底部径は 0.7m から 1.0m と同規模程度のものが多かった。S E1350 は、井戸枠石や底部の木枠はみられず、踏板と考えられる石材と、越前焼甕、鉄釉小壺、石臼、石盤、漆塗り皿などが出土した。S E1351 は、建物 S B1342 の土間に築かれた井戸で、2m × 3.5m の石敷の洗い場 S X1392 と石組溝 S D1374 をともなっている。S E1353 は、掘立柱建物 S B1345 (井戸屋形か) にともなう井戸で、底部に木枠を組み、踏板と考えられる石材や石塔の台座などが投げ込まれていた。越前焼甕・鉢・播鉢、天目茶入れ、白磁皿、石鉢、銅銭 409 枚などが出土した。S E1354 は、



底部に木枠を組み、越前焼甕・壺(釣瓶用)、天目茶碗、白磁皿、染付皿、木製釣瓶桶4組分などが出土した。S E 1355は、上面が削平されており、その中にガラ石が詰められていた。S E 1356は、井戸枠石や底部の木枠はみられず、永禄・元亀の銘のある石製塔婆が投げ込まれており、越前焼甕・壺、石臼、バンドコなどが出土した。S E 1377は、外濠S D 1407の肩部に掘られた井戸で、上面は削平され底部までわずか0.9m分しか残存していなかった。

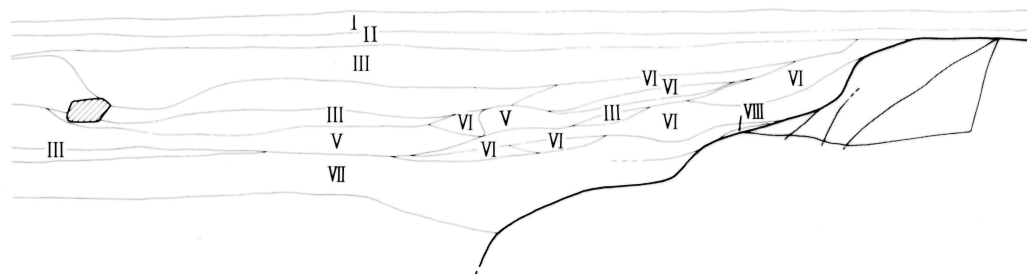
S F 1358～1366 石積施設は9基検出した。ほとんどが河原石を3～4段に積んだものであるが、S F 1364だけは山石を4～5段程度積んでいる。天端の石が残っているのは、S F 1360・1362・1365・1366の4基しかなく、それもさほど丁寧な作りのものではない。S F 1358・1359は、黄土がつまっていたが2辺の石がともに欠損していた。S F 1360は、長辺1.5mのものを後で石列S X 1394を作る際に1mに縮小している。

S D 1367～1381 石組溝S D 1367・1368は、道路の側溝で南から北に向かって流れている。S D 1369～1374の溝は、各屋敷を区切る排水溝で、とくにS D 1371は、S D 1369の溝を破棄して作られており、暗渠排水施設S Z 1382をもちその上に砂利を叩き締めて置いてあったことから屋敷内の溝と考えられる。S D 1379は、S D 1378に流路を作りかえられているが、そのS D 1378も溝の片側の石が破壊されていた。

S D 1409 下城戸の外濠の有無を確かめるため3本のトレンチを城戸に直角に設定した。検出した外濠S D 1407は、幅約10mで肩部は地山を削って作られている。城戸側の肩部には石垣が地山の上に据えられており、その石垣と城戸裾までの間に幅約3mの平坦部がみられる。これは犬走りと考えられる。第Ⅰ～Ⅶ層までは後世の攪乱層であるが、第Ⅷ層以下は攪乱されていないものと思われる。箱堀形式の濠と考えられるが、濠底までは掘り下げなかった。

今回の調査でも、道路に面した狭い屋敷が棟を並べて建てられているのが検出された。谷内にはこのような屋敷が上級武家屋敷の間に多く群在しているようである。その中で埋葬施設を有する屋敷の性格等を追求すれば、谷内に居住した人達の身分も判明してくるであろう。

- | | |
|------------|-------------|
| I. 耕土及び盛土 | V. 茶褐色土 |
| II. 床土 | VI. 砂利・砂 |
| III. 砂・礫 | VII. 青灰色粘質土 |
| IV. 砂・礫混り土 | VIII. 粘質土 |



発掘された遺物

出土遺物の大部分を越前焼の甕・壺・鉢と土師質皿類が占め、それに中国製の青磁・白磁・染付・鉄釉壺等が加わる。これら輸入陶磁器を補う形で天目茶碗や灰釉皿を中心とした瀬戸・美濃製品があり、さらに少量の朝鮮製の蕎麦茶碗や交趾、生産地不明の壺等がある。また、バンドコ・鉢・砥石・硯といった石製品、井戸や濠からは漆器や折敷等の木製品、鉄釘・銅銭等の金属製品が出土している。

越前焼 P.L. 9 第4・5・6図

甕 大甕が埋甕施設 S X 1388から28個体、S X 1386から16個体出土した。これら2ヶ所の埋甕施設は2個体と26個体、1個体と16個体の二群に分れていた。前者の2個体は口縁部が10cm程立ちあがる中甕の形態をとっているが容積的にはあまり大差がない。これらの大甕4・5は、口縁部が肥厚し、スタンプは凹の「本」字で、すべてⅢ期に属する。3は下層出土の大甕で、すでに口縁部が肥厚し始め立ちあがりも短く、Ⅱ期とⅢ期の中間的な形態をしている。ただスタンプは図示できなかったが、Ⅲ期のそれと同じである。1は今回検出した遺構の時期をはずれる古い甕で、口縁部が回り、内側の段もまだ残っている所からⅠ期に属すると考えられる。肩部には「源…」と窠書されている。その他Ⅱ期に属する甕がこれまでの調査区に較べて多く出土したことが注目される。なお時期区分については「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅸ・Ⅹ」「史跡柚山城跡Ⅱ」に詳しい。

壺は甕に較べて量的に少なく500点程度しかない。6は一乗谷ではごく普通に見られる「お歯黒壺」で8個体出土している。胎土はやや荒く、大きさの割には厚く作られている。口縁部は片口になるのが一般的で、双耳がついている例もある。7は「お歯黒壺」に似ているが、やや胴体が長く、口縁部の片口の造りがやや異形である。9・10は高さが25cmまでの小壺で、やや外側に開く短い頸部は、口縁下が軽く凹むため、中央が少しふくらんで見える。肩はなだらかで、胴部に最大径があり、そこから底部にむかって直線的にすばむ。11は井戸 S E 1353から出土したもので、頸部に縄が巻きつけられており釣瓶として使用されたと推定される。12は小さい口頸部がほぼ垂直に立ちあがり、端部を折るかえして丸くおさめている。15はその口縁を互違いに削り取ったものである。これらは胴部が大きく張り、丸みをもって小さめの底部へ続く。16の口縁は小さく垂直に立ちあがり、端部は外側へ折り返している。肩はやや張り気味で、頸部に近い所に耳がつく。胴部が長く高さは42cmを測る。8は下層から出土した壺で、口頸部が大きく外に開き、一方に片口が作られている。やや古い形態を残しており、大甕3や播鉢17に対応すると考えられる。

播鉢 17は下層から出土し、口縁は内傾化して切られ始め、その下の凹線は段になっている。播目は段までで止り、間隔が広く底部でわずかに重なる程度である。18は上層から出土した。

口縁は断面が三角になり、播目は段をこして口縁の端までつけられ、また間隔が密になって底部では大きく重なり合うようになる。

今回の調査では、計画的町割施工後大きくは3層の遺構面が認められた。第1層は朝倉氏が亡んだ時の、第3層は町割施工期にあたと推定される。遺物から見ると、第3層のそれはⅡ期とⅢ期の中間的形態をしており、第1層のそれは典型的Ⅲ期である。第2層は良好な資料ではないが、Ⅲ期の甕が見られた。ただ、30次調査の埋甕施設内では中間的形態とⅢ期の甕が混在していたこともあり、町割施工が16C初頭頃と推定され、Ⅲ期に移行したのは、天正元年をあまり溯らない時期と考えられよう。

土師質土器・瓦質陶器 PL. 10 第7図

下城戸外壕中トレンチから一度に投棄されたと思われる多量の土師質土器が検出された。皿類は多数の完形品を含んでおり、またA～D類の各種がそろっていた。(表1)、A類はいわゆる「ヘソ皿」で灯心痕がない。B類は灯心痕のある皿が多い。C₂類は量的に最も多く、灯心痕を有するものが2倍近くあり、遺物整理過程の水洗の段階で灯心痕が取れたと見られるふしもあり、灯明皿として使用された割合はさらに高まると思われる。D₁類の灯心痕の有無の割合はほぼ2：3であるが、口径が14cmをこえるD₂類では灯心痕を有する皿はない。以上からC₂類は主に灯明皿用として大量に作られまた消費していたと考えられ、D₁類は灯明皿と、酒杯用に、D₂類は盛皿用に用いられたのだろう。

また中トレンチからは羽釜(21・22)や土錘(31・32)も出土している。羽釜は羽より下に煤が付着しており、小形ながら実用に供されたことを示している。土錘は両方とも40gを測り、粘土塊を握り締め両方から穴をあけたものである。

瓦質陶器では、香炉や火鉢がある。33は口径11.5cmの筒形の胴を有し、その中央に円形の列点文のスタンプが廻っている。

第1表 土師質皿使用度合

	A 類	B 類	C ₁ 類	C ₂ 類	D ₁ 類		D ₂ 類	計
	2寸	2.3寸	2寸	3寸	3.5寸	4寸	4.5寸以上	
灯心痕有		18 9.6	2 1.0	65 34.7	16 8.5	7 3.7		108 (%)
灯心痕無	2 1.0	5 2.6		34 18.1	18 9.6	13 6.9	7 3.7	79 (%)
計	2 1.0	23 12.3	2 1.0	99 52.9	34 18.1	20 10.7	7 3.7	187

瀬戸・美濃製品 PL. 10 第8図

鉄釉が施されているものに、天目茶碗・茶入れ・水注・小皿・壺等がある。特に天目茶碗は100個体近く出土しており、量的に最も多い。34はその一つで、口径12cm、高さ8cmを測る。口縁下で軽くくびれ、全体に直線的で、削り出しの内反り高台をもち腰部には鬼板が塗られている。37は小形の水注で、口縁がやや上にのびて軽く外反する。前後に把手がつき、簡単な注ぎ口をもつ。内面と上 $\frac{2}{3}$ に鉄釉がかけられ、露胎部には薄く鬼板が塗付されている。底は糸切りのままである。徳利には38のように小形のものから底部の径が20cm近い大形のものまである。底部近くに最もふくらんだ所があり、安定した形をしている。39は茶入の形制になく、合子であろうか。ロクロで薄く挽きあげ、少し内傾する口縁がついている。灰釉皿に較べて鉄釉の皿は少なく9個体しか出土していない。35・36は碁笥底になっており、腰から下はへら削りによって成形されている。見込みに3ヶ所ピン跡があり、高台内には輪トチの跡を残している。

灰釉は75個体の皿と6個体の碗が出土した。碗は青磁碗の写しで高台がやや扁平な点が異なるが、退化した蓮弁がつく例もある。

皿は口縁が端反りにになっている例と内湾しているものがあるが、前者が多い。40～42は、腰部以下をへら削り成形後、高台を貼付けたもので、高台内には輪トチの跡が残る。43は端反りが大きく、44はそれをつまんで輪花状にしたもので、他に比較して高台がしっかりしている。45は内湾する皿のうち付高台を有するもので、腰部から高台にかけての成形技法は端反りのものと同じである。46は碁笥底で、見込みは露胎になっている。

中国製陶磁器 PL. 11・12 第9・10図

青磁碗は91個体出土しており、49～51は一乗谷で出土する碗の代表例である。粗厚で小ぶりな高台を有し、線刻の蓮弁がめぐる。51は蓮弁がなく、口縁下に一条の沈線が廻るのみである。これら青磁碗の釉色は様々だがくすんだオリーブ色したものが多く、48のように器形が開いた例もあり、線刻の蓮弁がやや大きい。

青磁皿では菊花皿が20個体、稜花皿が15個体と出土例が多い。稜花皿は厚手で、腰に稜があり、この稜から大きく外反する。口縁部には3条の線刻がはしる。菊花皿には高台裏が白磁になっている例も見られる。その他、青磁には内面が牡丹唐草文の盤・胴部に浮牡丹が型押された香炉・砧青磁の花生の口縁等が出土している。

白磁はそのほとんどが皿で、碗は61の1点が出ているだけである。口径が18cmと大きく丸味をもった腰部から大きく開きながら立ちあがり、口縁近くで軽く外反する。釉は灰色を呈する。

皿類は、口径が12cmの端反りの小皿(54・55)が280個体出土し、その大部分を占る。くすんだ青黄色の釉がかかり、高台の削りが大きく断面が三角形をなす。口縁端が矩形に作られている皿(52・53)が35個体出土した。これまでこうした高台を有する皿はほとんど出土せず、やや古いタイプであろうか。56は端反りがやや弱く、削り出し高台で畳付の釉を削り取らない

点や高台内の削り跡を残すなど全体の造りが悪く焼成も甘く、後出の感がある。57は菊皿で、S X 1386の甕内の焼土層から12個体まとまって出土した。細かい貫入が入った灰色の釉がかかった皿が10数個体出土しており、58は腰部がふくらみ、口縁部がわずかに外反する。59は底部から直線的に開き、見込みも平らで中央部がわずかに凹んでいるだけである。杯は底部から直線的に開くものと、小さい付高台を有し見込みを蛇目状にふきとったものが一般的だが62は厚い高台をもち、畳付には鉄釉が施されている。

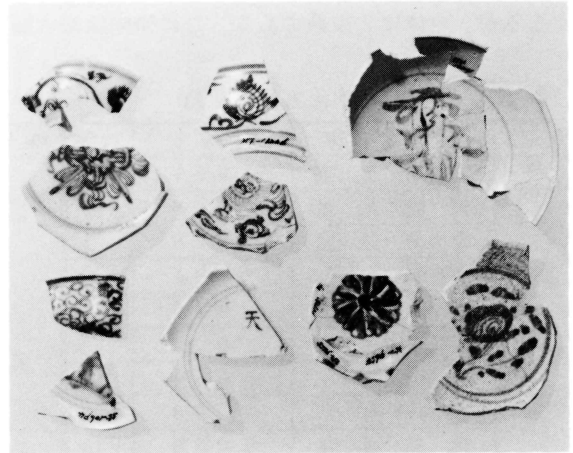
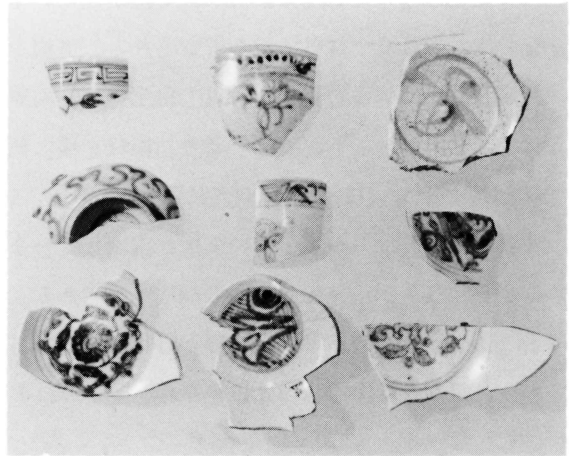
染付は碗と皿で構成され、その比は1 : 2と皿が多い。

碗では、外側は口縁下に横線が入るだけで饅頭心の見込みに人物を描いたもの(64)、口縁部に寿波文が廻り、腰から胴部にかけて唐草文を描いたもの、口縁部が寿波文・腰部が芭蕉文になったもの、高台付根に蓮弁・胴部全体に唐草文を描いたもの等の出土が多い。

皿類は 194個体出土しており、外側が宝相華唐草、見込みが十字花文になっている口径12cm前後の小皿が47個体と最も多く、口縁部に寿波文、腰部に芭蕉文を廻らし、見込みには草花文を描いた碁笥底の小皿、同じく外は無文で見込みに吉祥字を文様化した皿、外側に宝相華唐草見込みに獅子と毬鞠の中皿等がそれに次ぐ。このような出土状況は、一乗谷出土の染付類では古いタイプのもの割合が高いことを示している。また同じ文様構成でも66と67のように文様が崩れていく過程を示すものもあり興味深い。65は界線内に草花文を描き、中央に鉄分を含んだ土の魚文を白磁釉の上においたものである。碁笥底になっており、S X 1386の甕の焼土からまとまって出土した。

木製品 P L. 13 第11図

漆製品では杯・碗がある。68は内面が朱漆、外側が黒漆の杯で、木質部は腐ってなくなっていたが、漆が上質で厚かったためその器形を保った。69・70は全体に薄く黒漆が塗られ、後者



挿図3 染付碗・皿

は秋草文と考えられる文様が、朱漆で描かれている。杯に較べて質が落ちる。71は平面が長方形をなす連歯下駄で、材質は杉と推定される。上面から5ヶ所に竹釘跡がある。

井戸S E 1353から釣瓶が2対以上出土した。両側の板に刻みを入れ、竹釘でとめたもので、高さ24cm、上辺21cm、下辺17cmを測る。松材を横に使用している。

金属製品 P.L. 13・14 第11・12図

武器類では刀子・小柄・鎧の胸板が出土している。72は短刀にしては短く、茎の先を欠いているが刃わたりが19cmしかない。73は小柄である。サビがひどく詳細は不明。74は仏餉器で、29次調査出土のものとは大きき形ともほぼ同じである。75は銅製の紅血で、全体が菊花になっており、花卉数は20枚前後と推定され、見込みはおしべが格子状に毛彫されている。一部に紅が付着している。

銅銭が 409枚井戸S E 1353の底からまとまって出土した。唐の開通元宝から明の弘治通宝までであるが、主体は北宋銭である。この傾向は29次調査出土と同じである。

第2表 SE 1353出土古銭一覧表

時代	銭種	初 鑄 年	枚数	時代	銭種	初 鑄 年	枚数	
唐	開 通 元 宝	6 2 1	14	北	元 符 通 宝	1 0 9 8	4	
北	宋 通 元 宝	9 6 8	2		聖 宋 元 宝	1 1 0 1	15	
	太 平 通 宝	9 7 6	1		聖 宋 通 宝	1 1 0 1		
	淳 化 元 宝	9 9 1	5		崇 寧 通 宝	1 1 0 2		
	至 道 元 宝	9 9 5	9		大 觀 通 宝	1 1 0 7	3	
	咸 平 元 宝	9 9 8	7		政 和 通 宝	1 1 1 1	16	
	景 德 元 宝	1 0 0 4	14		宣 和 元 宝	1 1 1 9		
	祥 符 元 宝	1 0 0 8	21		宣 和 通 宝	1 1 1 9		
	祥 符 通 宝	1 0 0 8	18		金	正 隆 元 宝	1 1 5 6	2
	天 禧 通 宝	1 0 1 7	22		泰 和 通 宝	1 2 0 1		
	天 聖 元 宝	1 0 2 3	22	南	紹 興 元 宝	1 1 3 1		
明 道 元 宝	1 0 3 2	1	淳 熙 元 宝		1 1 7 4	1		
景 祐 元 宝	1 0 3 4	5	紹 熙 元 宝		1 1 8 9	2		
皇 宋 通 宝	1 0 3 9	44	慶 元 通 宝		1 1 9 5			
康 定 元 宝	1 0 4 0		嘉 泰 通 宝		1 2 0 1	2		
皇 祐 元 宝	1 0 4 9		開 禧 通 宝		1 2 0 5			
至 和 元 宝	1 0 5 4	7	嘉 定 通 宝		1 2 0 8	1		
至 和 通 宝	1 0 5 4	3	紹 定 通 宝		1 2 2 8			
嘉 祐 元 宝	1 0 5 6	6	景 定 元 宝		1 2 6 0	2		
嘉 祐 通 宝	1 0 5 6	8	明		大 中 通 宝	1 3 6 1		
治 平 元 宝	1 0 6 4	8		洪 武 通 宝	1 3 6 8	1		
治 平 通 宝	1 0 6 4	1		永 樂 通 宝	1 4 1 1			
熙 寧 元 宝	1 0 6 8	41		宣 德 通 宝	1 4 3 3			
元 豐 通 宝	1 0 7 8	49		弘 治 通 宝	1 4 8 8	1		
元 祐 通 宝	1 0 8 6	30		不 明		7		
紹 聖 元 宝	1 0 9 4	17						
紹 聖 通 宝	1 0 9 4		合 計		412			

その他の調査

第 33 次 調査

福井市安波賀町15字宮下9-1、9-2番地で、ホテルの里資料館建設に伴う現状変更申請地の事前調査である。面積は約30㎡である。越前襲その他若干の遺物を出土した他は遺構も検出されなかった。調査は4月3日から4月6日までの短期間で終了した。

第 34 次 調査

福井市城戸ノ内町8-39番地で、細田貴義氏宅の増築に伴う現状変更地の事前調査である。面積は約120㎡である。

今回の調査地は第17次調査地サイゴージ跡と第18次調査地瓢町武家屋敷跡とのほぼ中間に位置し、一乗谷川の東岸、旧河川敷が予想される畑地である。しかし、現地形では家屋敷や畑地の境界をほぼ東西に走り、東側が山裾にとりついていたことを推定させる土塁の痕跡が見られることから、街屋敷の遺構が検出される可能性がもたれた。調査は5月16日から6月6日まで行なわれた。

発掘された遺構

S A 1330 ほぼ東西方向に走る土塁で、東側に暗渠 S Z 1332が見られる。土塁北面が発掘区外のため、詳細は不明だが暗渠部分での計測によって、巾約3m、高さ約0.5㎡の規模が知られる。しかし、その上部は遺構面を覆っていた砂質土層が形成される段階で削平されたものと思われる。

S D 1331・S Z 1332 土塁 S A 1330の東側で検出された暗渠 S Z 1332は傾斜角約5度を計る。北側には砂礫土・青灰色粘質土が堆積していた。天井部は土塁の削平に伴って若干荒されていたが底部は等大の扁平な河原石がびっしりと敷き詰められている。溝 S D 1331は暗渠 S Z 1332南側より南西方向に弧状に約5m確認された。遺存状態は悪く、側石の一部がとばされている。

S F 1333 下層で検出された石積施設である。土塁 S A 1330の石垣下から検出され、天端石の一部がとばされている他は遺存度は極めて良好である。規模は長径3.25m、短径2.15m、深さ1.45mをはかる。既応の調査例として第24次武家屋敷内で確認された S F 851がある。楕円形プランを呈し、形態に差があるがほぼ同規模の石積施設と考えられる。埋土は炭・焼土混りの砂礫土でしまりも悪くボソボソである。遺物はほとんど含まれておらず、短期間に埋められたものと思われる。埋土中には土塁の石垣に沿って石列が見られた。石垣の地崩れを防ぐための根石と考えられる。

発掘された遺物

耕土中、および砂質土で若干の陶磁器片を出土したほかは殆んどみられなかった。

環 境 整 備

昭和54年度は、53年度に発掘調査した平井、川合殿地区の武家屋敷跡2900㎡を整備するとともに、湯殿跡庭園南側の空濠に遊歩道橋を架橋した。また湯殿跡庭園側には柵を設け、簡易な遊歩道を造成した。工事は請負で、54年9月～55年3月にかけて行われた。直営工事では、平井、川合殿地係の西側山裾に幅1.5m、延長400mの園路を造成した。

武家屋敷跡整備工

本年度の整備地の大部分は川合殿地区にかかるが、この地区は環境整備基本計画で町並復元地区とされているところである。発掘の結果、間口6m～12m、奥行12mほどの小さな屋敷跡が多数確認された。検出した主な遺構は、建物、道路、溝、井戸、石積施設跡などである。

小区画の屋敷跡は、その大きさと配置が明瞭に分るように、砂利混りソイルセメント舗装や小砂利敷、芝張などで、それぞれ材料をかえて整備した。

建物跡S B 1192は、碎石を5cm厚に敷き基礎とし、その上にレミファルトを5cm厚で舗装した。また建物内の土間や石敷の部分には、ソイルセメント舗装を行った。なお建物の南側のS G 1260には小玉砂利が敷かれてあったが、薄かったので同程度の大きさの小玉砂利を補充化粧敷した。建物跡S B 1022には越前焼甕据付ピットが12個検出されたので、大甕完形品1個、底部(高55cm)10個と中甕完形品1個を復元、それぞれの位置に設置した。井戸は、発掘した井戸碎片を参考にし、同材料、同形式で合計12基を復元設置した。

道路の西側の屋敷跡は未発掘であるが、入口と道路側の土塁は推定できたので芝張で表示した。入口の部分は階段状につくってある。

遺構のないところには、観賞と緑陰をかねて3.5m内外の高木を植栽した。樹種はアカマツ、ケヤキ、ノムラカエデ、シダレヤナギ、ヤマザクラなどである。

遊歩道橋工

見学者が湯殿跡庭園から中の御殿跡に容易に渡れるように、空濠に架橋した。

橋長13.27m、橋幅1.77mで、橋桁にはH鋼(340mm×250×9×14)を用いた。桁の上面と側面を厚さ3.5cmのヒノキ板材で覆い、鋼材が見えないよう配慮した。また空濠斜面や石垣をこわさないよう掘削、10cm厚の碎石基礎の上に、コンクリート製橋台(50cm×50×190)を構築した。橋の床材には、PC板(4cm×30×150)を使用、その上に小砂利を一層化粧敷した。

なお湯殿跡庭園側には、空濠に沿って1.5m間隔でスギの焼丸太を地上40cm高で打込み、径1cmのシュロ縄を通し、橋に続く簡易な遊歩道を造成した。さらに南側にはドウダンツツジを列植、空濠への転落防止を考慮した。

また北側には、サザンカやゴヨウマツ、ヤマモミジを配植、庭園側から遊歩道橋が目立たないようにした。

研 究 所 要 項

I 事業概要

1. 研究事業

イ. 朝倉氏遺跡発掘調査

第33・34・35・36次調査

ロ. 第29・30次武家屋敷跡整備、遊歩道橋工 園路造成

ハ. 中世城郭分布調査

ニ. 古文書調査

2. 他機関への指導・協力

イ. 調査・整備

○豊原寺跡（丸岡町）7・8月

藤原・水藤・水野・小野・吉岡・岩田・南

○小丸城跡（武生市）7月

吉岡

○福井城跡（福井市）7月

吉岡

○若狭国分寺跡（小浜市）8・10月

藤原

○柚山城跡（南条町）6・11月

藤原

ロ. その他

○「よみがえる考古遺物—その保存と活用」

10・11月 元興寺文化財研究所

○「戦国時代の城郭と館」

10・11月 近江風土記の丘資料館

3. 朝倉氏遺跡調査研究協議会

1980年2月22日 於 東京

「建物の立体復原について」

「公園センターについて」

4. 特別史跡内現状変更申請について

申請件数

主な理由と面積

家屋の新・増・改築等 723㎡

菜園・森林伐採、その他 20198㎡

発掘・環境整備 8700㎡

計 29621㎡

II 予 算

発掘調査費 3,000.0万円

中世城郭分布調査費 150.0万円

環境整備費 1,500.0万円

研究所費 91.6万円

計 4,741.6万円

III 組織規定

福井県教育委員会行政組織規則 抜萃

（昭和46年6月1日
福井県教育委員会規則第5号）

改正 昭和46年12月23日教委規則第12号

昭和47年4月1日教委規則第3号

昭和47年10月24日教委規則第8号

第二節 出先機関（設置名称等）

第13条 出先機関として、支局、へき地、複式教育事務所、特殊教育推進事務所および文化財事務所を置く。

2. 出先機関の名称、位置および所管区域は、次表のとおりとする。

機関の区分	名 称	位 置	所 管 区 域
文化財事務所	福井県教育庁 朝倉氏遺跡調査研究所	福井市	福井市（特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の指定区域）

（出先機関の所掌事務）

第15条 各出先機関の所掌する事務は、次表のとおりとする。

機関の区分	所 掌 事 務 所
	1. 史跡の発掘および発掘技法の研究に関すること。 2. 史跡の環境整備および遺構修景の研究に関すること。 3. 史跡の出土品の調査および研究に関すること。 4. 中世史の研究に関すること。

附則（昭和47年4月1日教育委員会規則第3号）

この規則は昭和47年4月1日から施行する。

IV 職 員（昭和55年3月31日現在）

氏 名	官	職	
藤原武二	教育庁技術職員	所長	造園
水藤 真	教育庁技術職員	文化財調査員	歴史
水野和雄	教育庁技術職員	文化財調査員	考古
小野正敏	教育庁技術職員	文化財調査員	考古
岩田 隆	教育庁技術職員	文化財調査員	考古
吉岡泰英	教育庁技術職員	文化財調査員	建築
南洋一郎	教育庁技術職員	文化財調査員	考古
吉越 強	事務補助員		

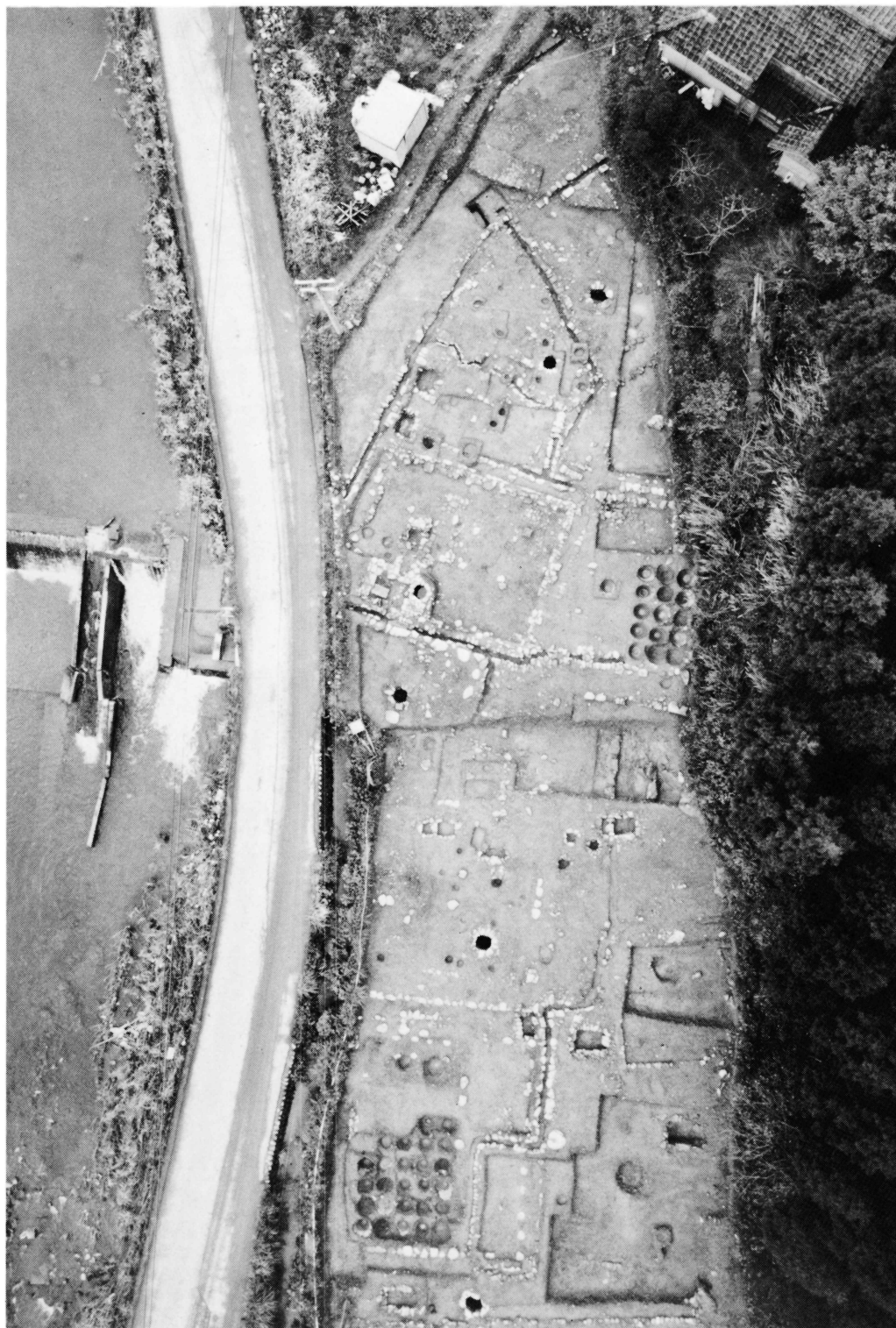
PL. 1



第35次調査 建物 SB1342 北から



第35次調査 埋葬施設 S X 1388 北から



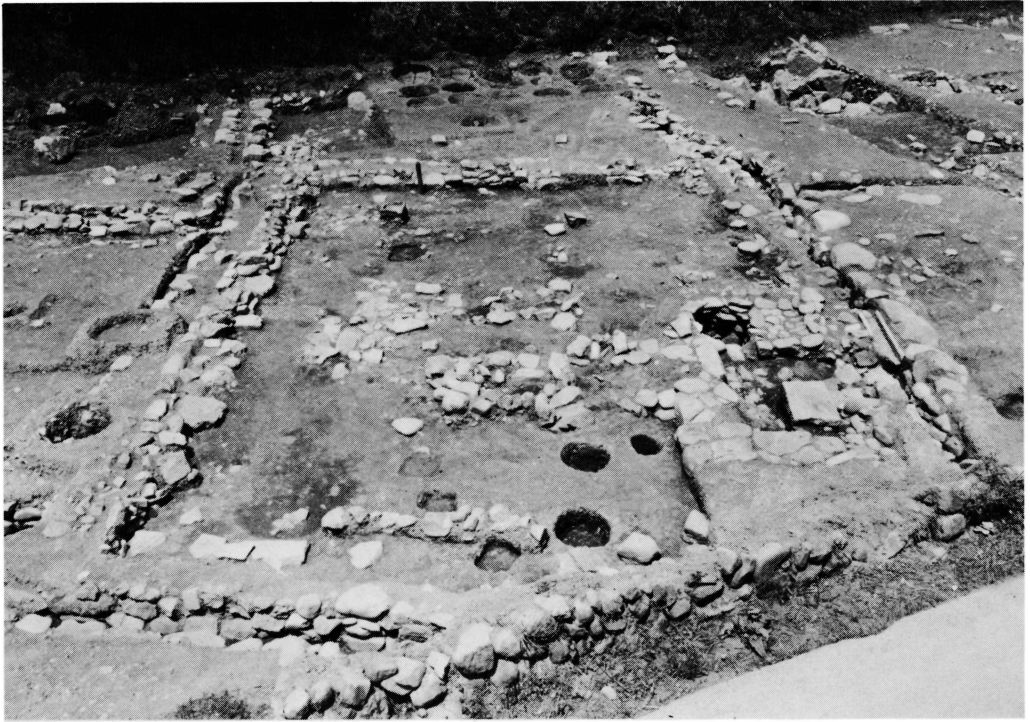
調査主要部の空中写真



南部主要建物群 北から



建物 SB1414の細部 南から



建 物 SB1342 東から



建 物 SB1342細部 北から



埋甕施設 S X 1386 東から



埋甕施設 S X 1388 東から



礎石建物 SB1348 北から



北部主要遺構 東から



下城戸外濠西トレンチ 南から



下城戸外濠中トレンチ 南から



下城戸外濠東トレンチ 北から

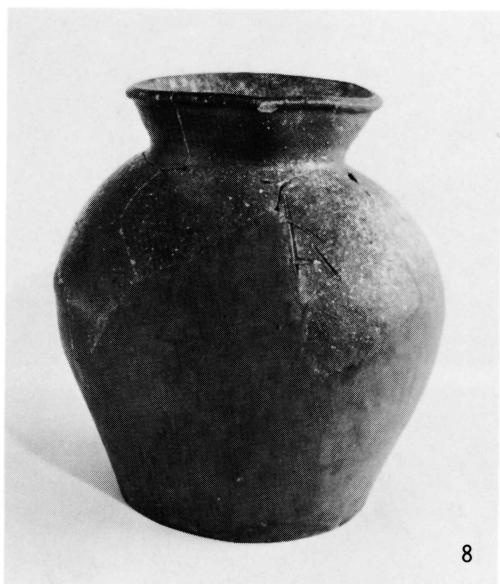


東トレンチ細部 中トレンチ井戸 SE1357



井戸 SE1349. 1350. 1351. 1352

井戸 SE1353. 1354. 1355. 1356



8



7



15



11

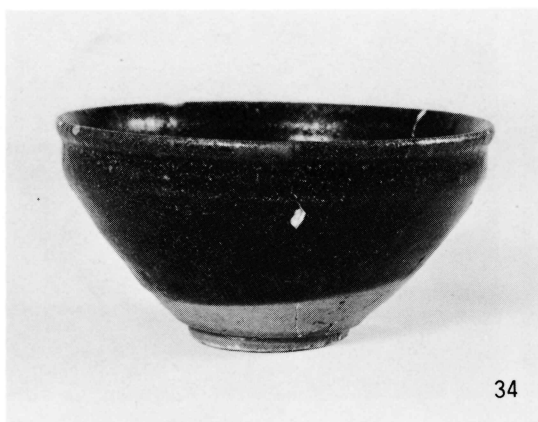


19



18

7・8・11・15 越前焼壺
 18 越前焼播鉢
 19 越前焼鉢



34



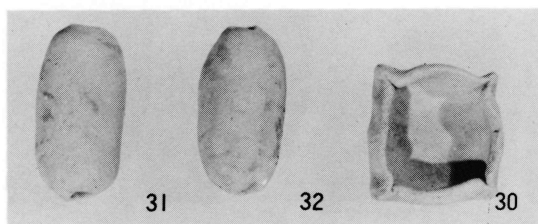
37



43



46



31

32

30



33



21



22

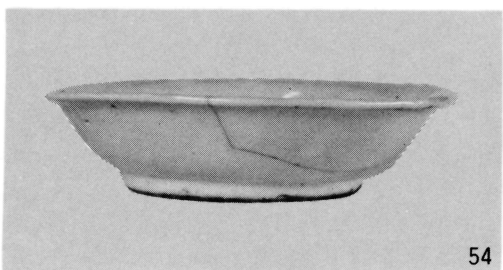
21・22 羽 釜 30 土師質皿 31・32 土 錘 33 瓦質香炉
 34 天目茶碗 37 鉄釉水注 43・46 灰釉皿



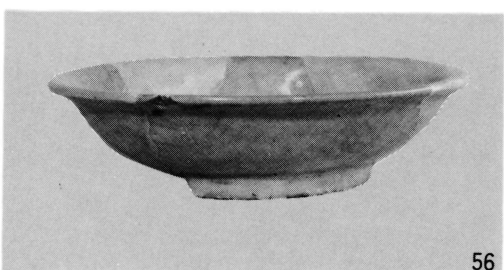
50



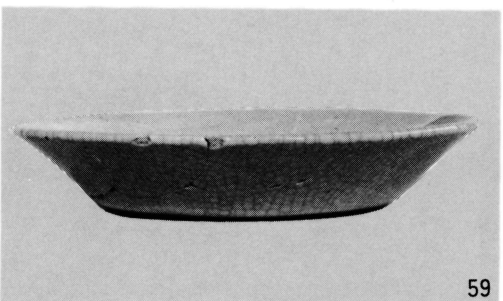
51



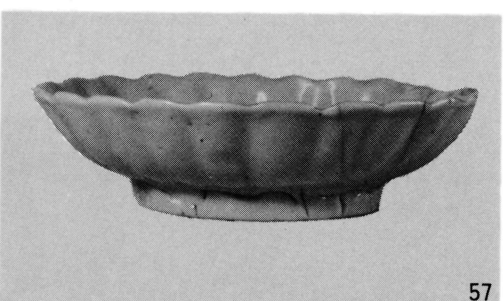
54



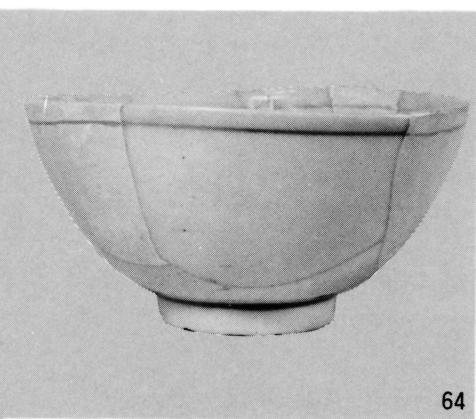
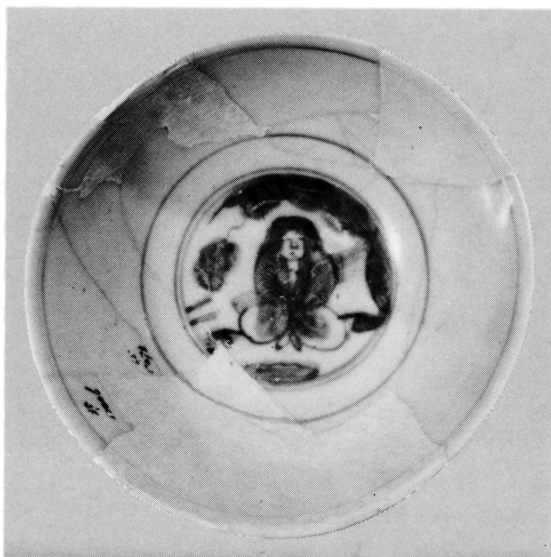
56



59



57



64

50・51 青磁碗
54・56・57・59 白磁皿
64 染付碗



67



66



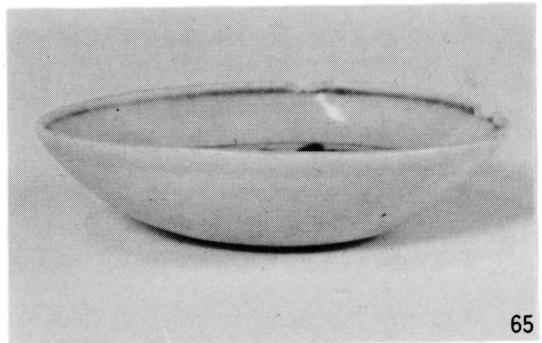
67



65

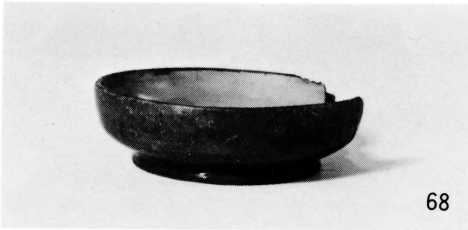


67

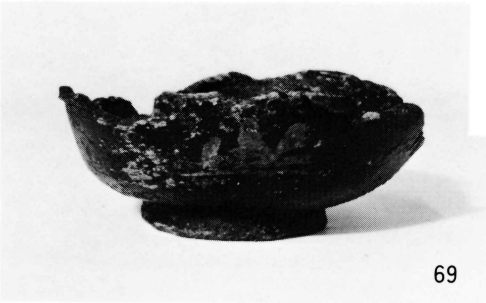


65

65・66・67 染付皿



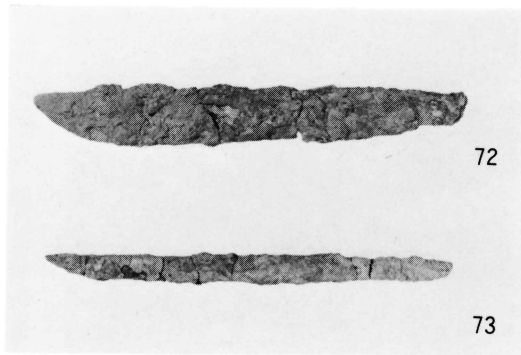
68



69

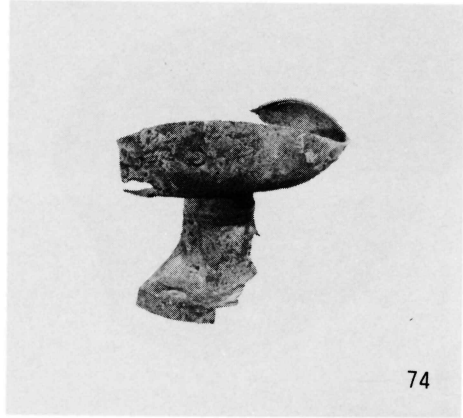


70

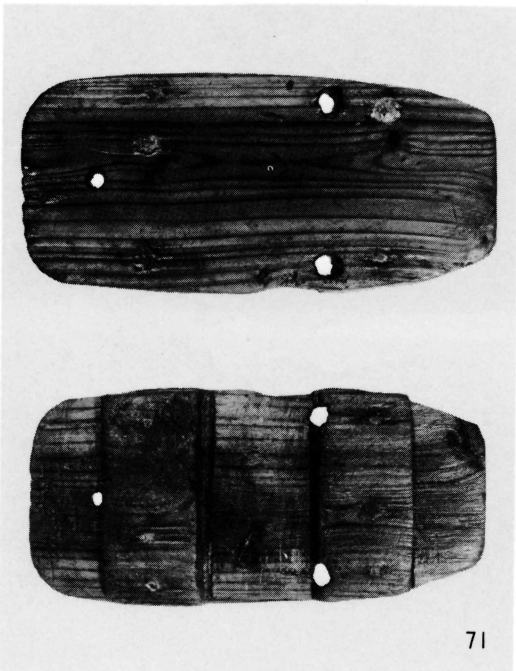


72

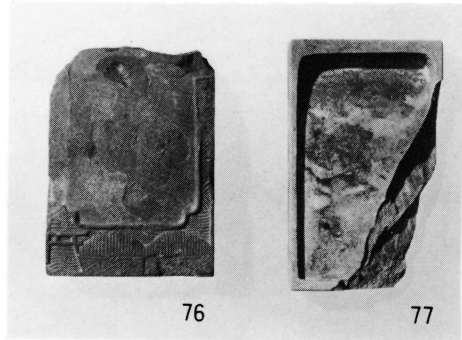
73



74

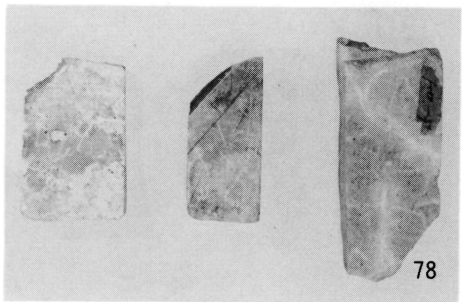


71



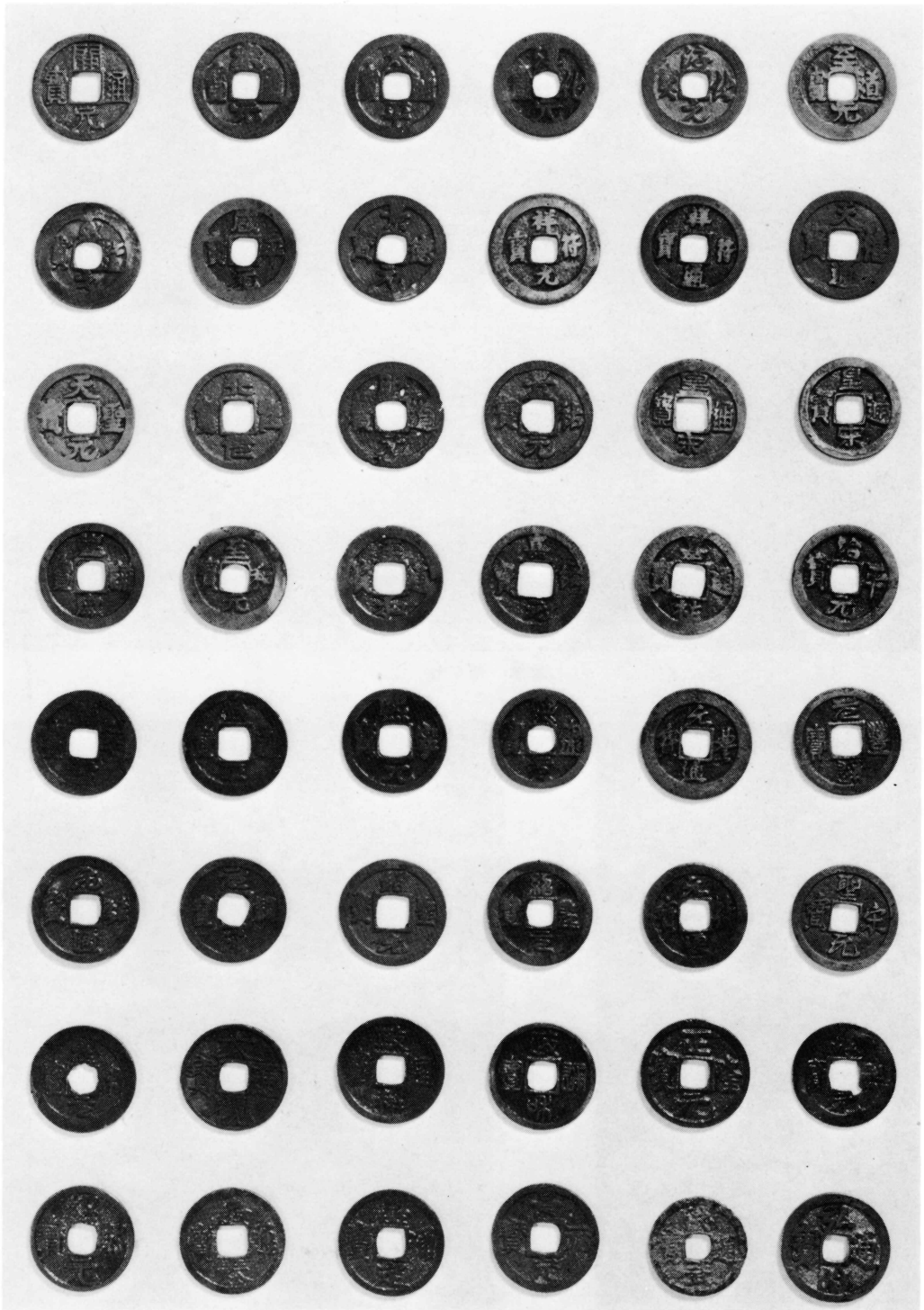
76

77



78

68 漆杯 69・70 漆碗 71 下駄 72 短刀
 73 小柄 74 仏餉器 76・77 硯 78 砥石



銅 錢



全景 南から



暗渠S Z 1332 北から



石積施設S F 1333 東から



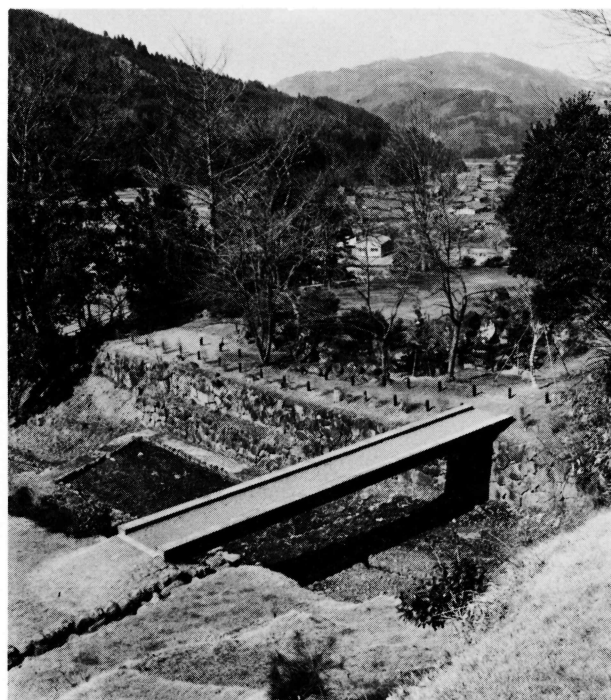
第29・30次武家屋敷跡整備状況 北から



第29・30次武家屋敷跡整備状況 南から



SB1022 整備状況 西から



遊歩道橋・園路 東南から

第33次発掘調査地

下城戸跡

第35次発掘調査地

第1図 発掘調査・環境整備位置図



御茸山古墳群

瓢町屋敷跡



第34次発掘調査地

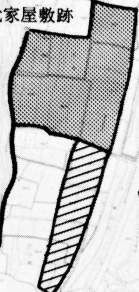
サイゴージ跡



一乗谷川

既設園路

武家屋敷跡



昭和54年度整備地

本館跡

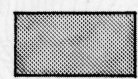
中の御殿跡

南陽寺跡

英林塚

諏訪館跡

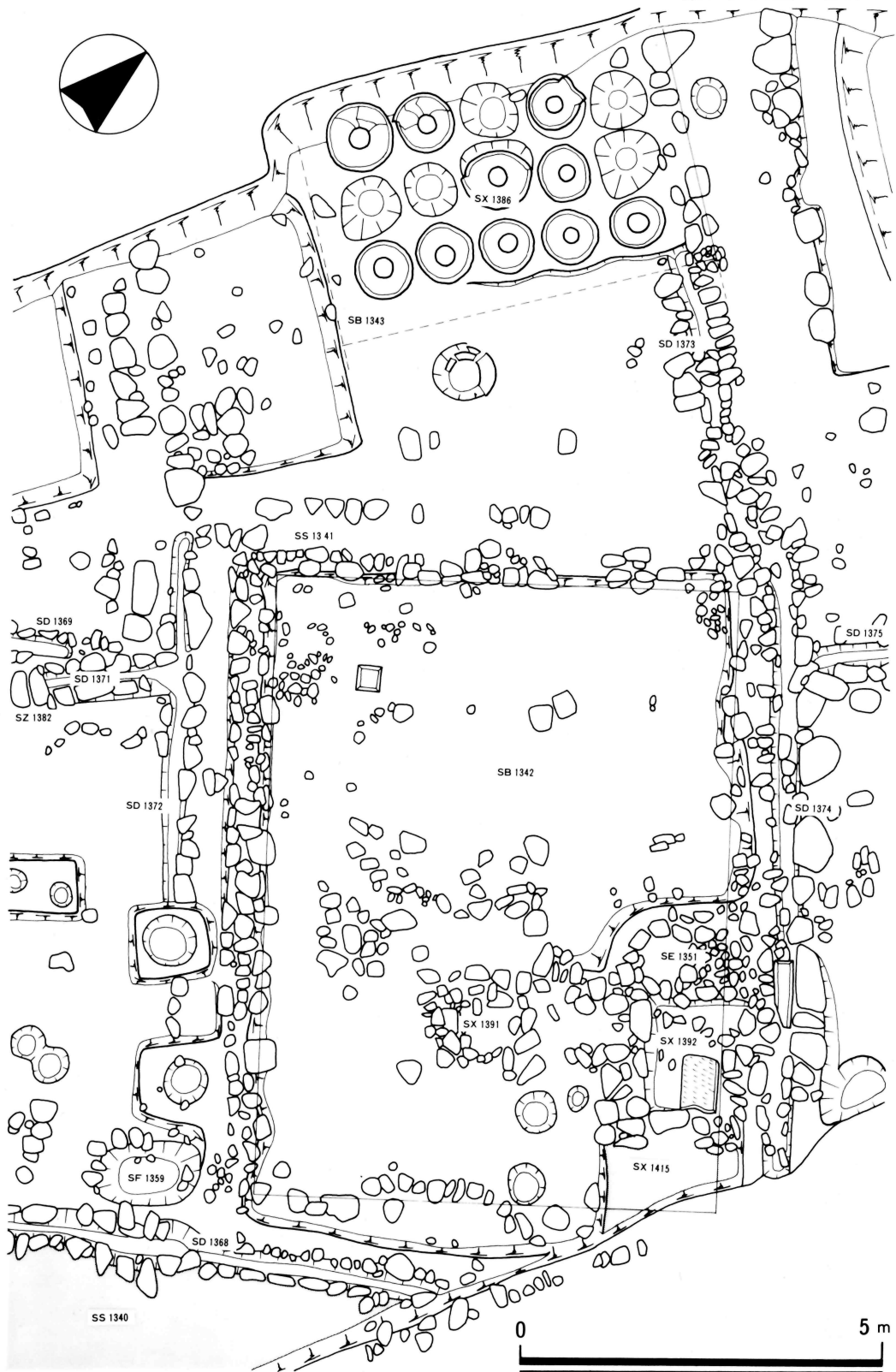
既設園路



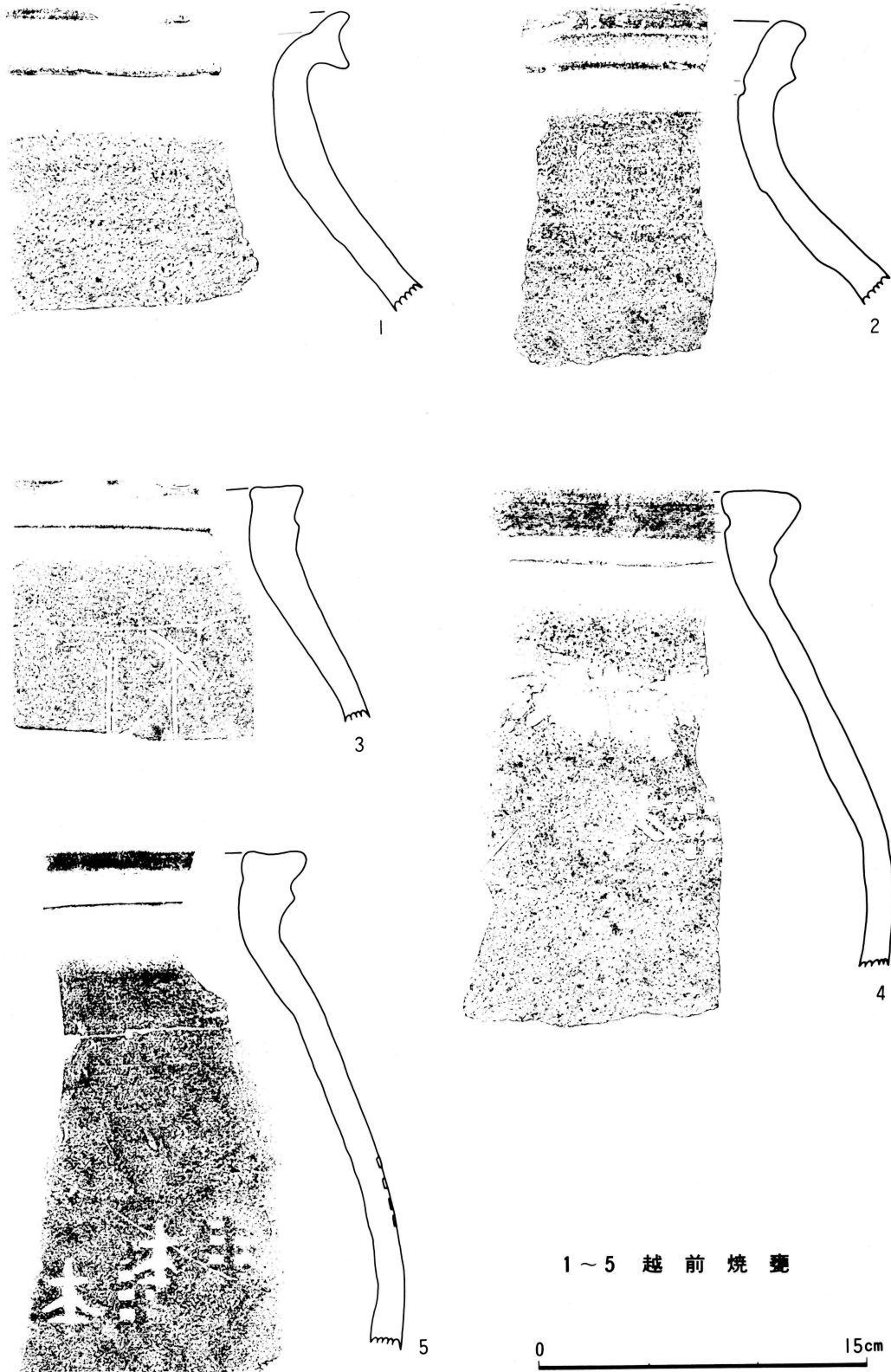
既整備地

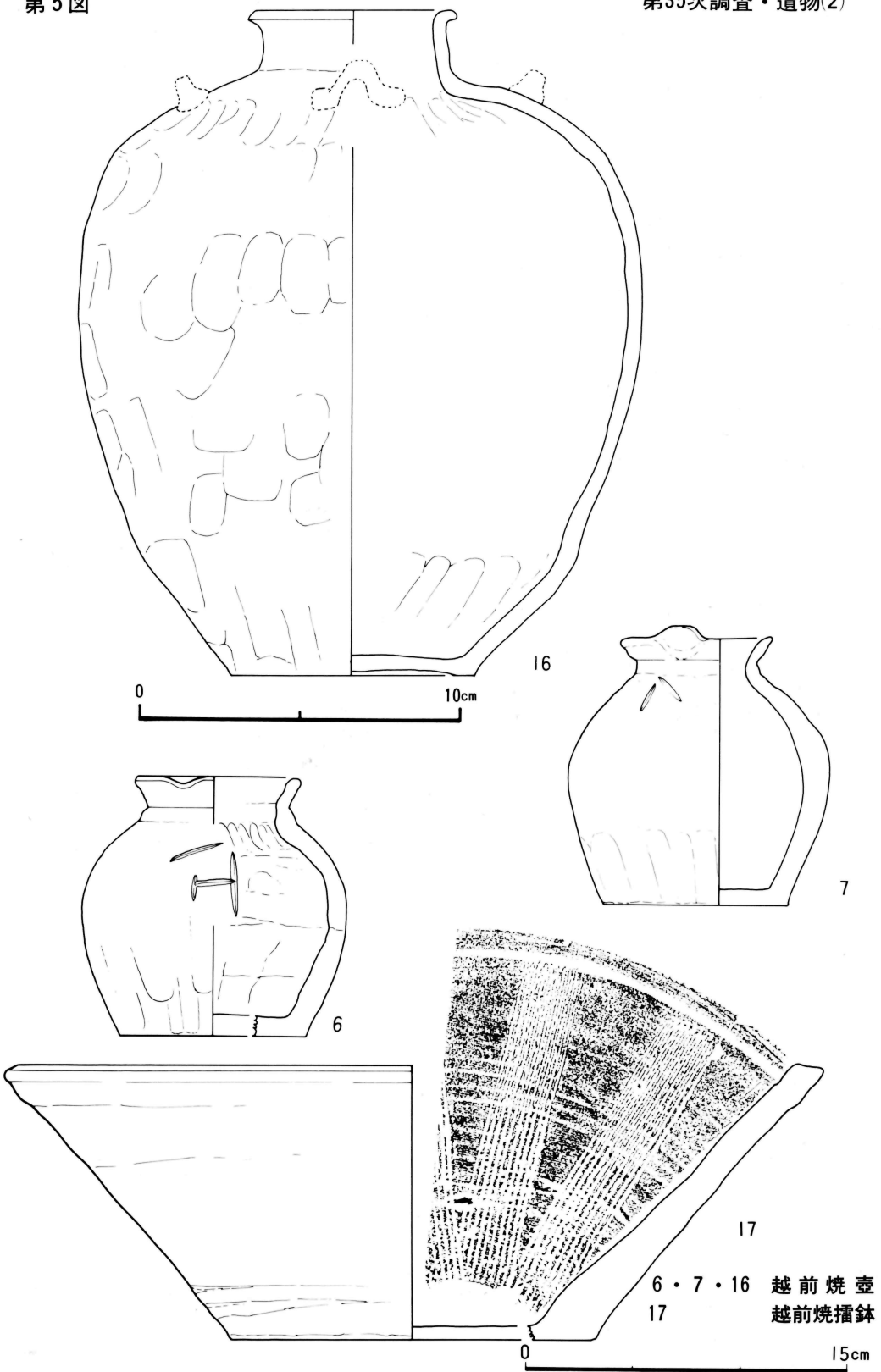


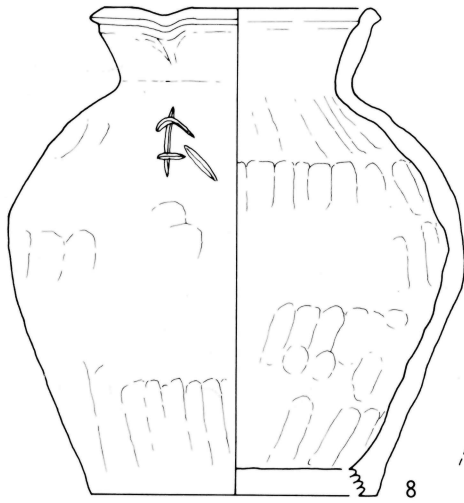
上城戸跡



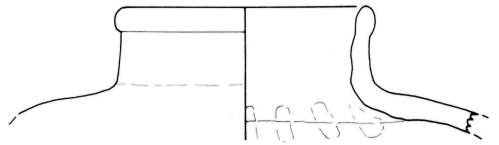




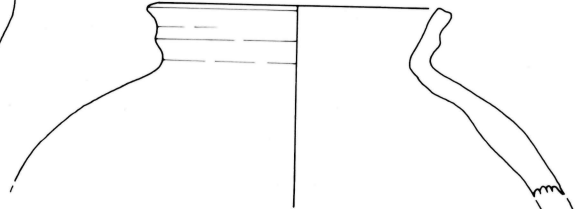




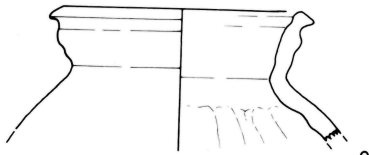
8



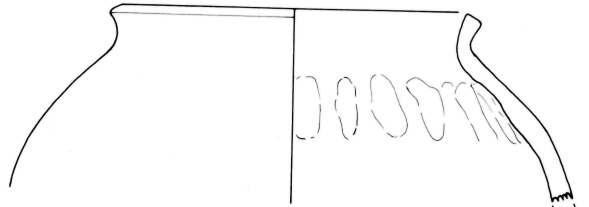
12



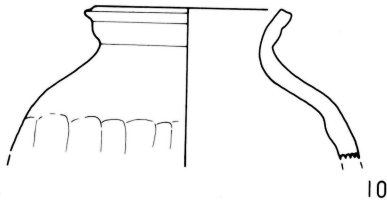
13



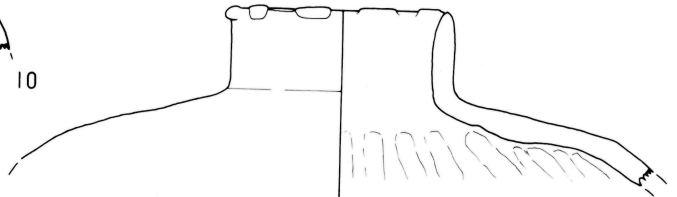
9



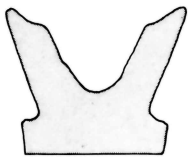
14



10



15



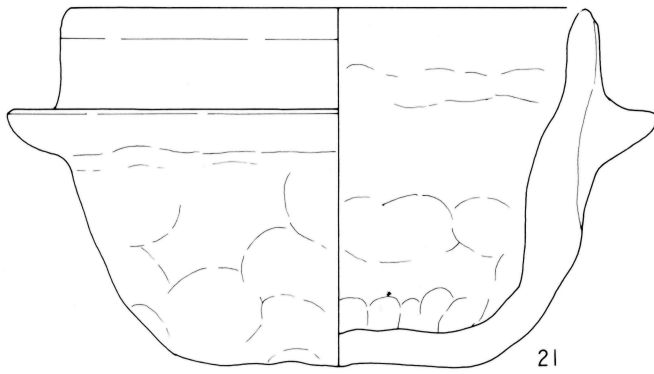
20

8~15 越前焼壺
20 越前焼茶研

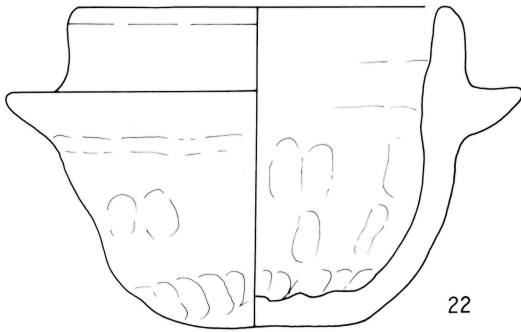


第7図

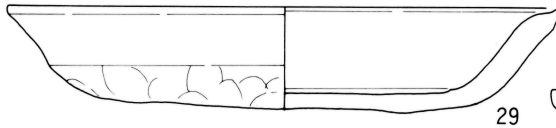
第35次調査・遺物(4)



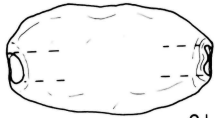
21



22



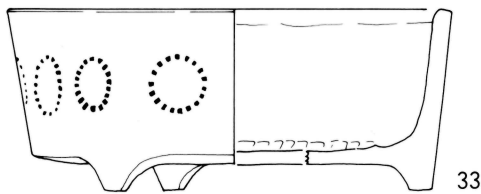
29



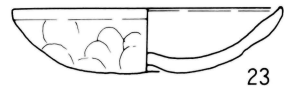
31



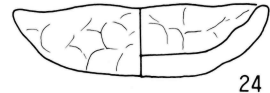
32



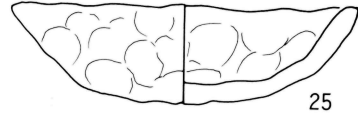
33



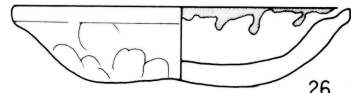
23



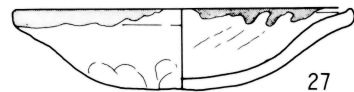
24



25



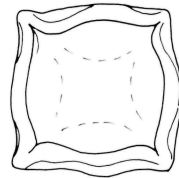
26



27



28



30

21・22 土師質羽釜

23 土師質皿A

24・25 土師質皿B

26・27 土師質皿C

28・29 土師質皿D

30 土師質皿

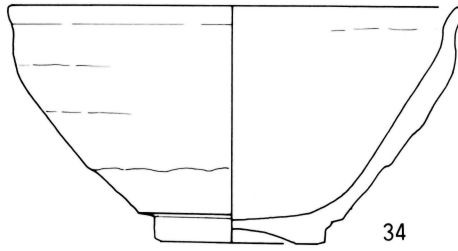
31・32 土 錘

33 瓦質香炉

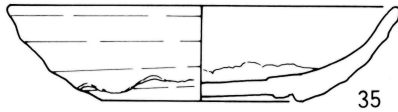


第8図

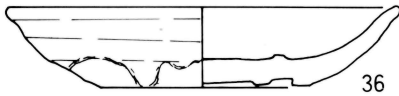
第35次調査・遺物(5)



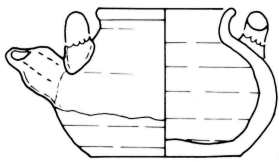
34



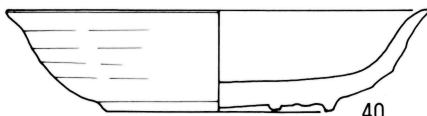
35



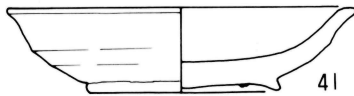
36



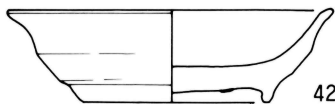
37



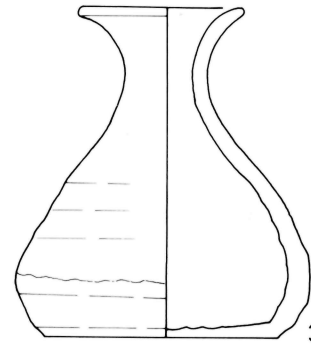
40



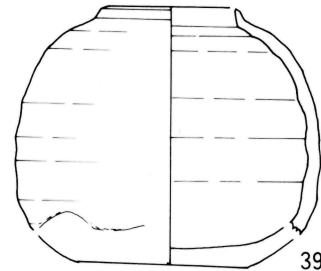
41



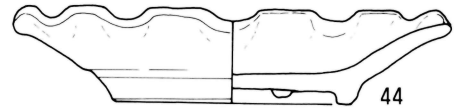
42



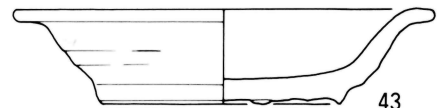
38



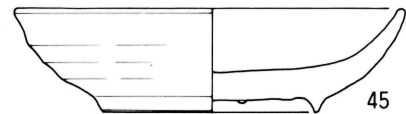
39



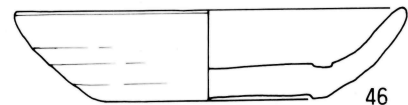
44



43



45



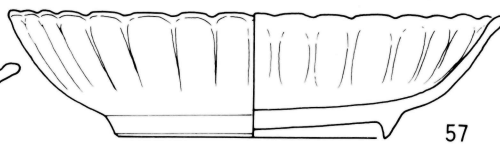
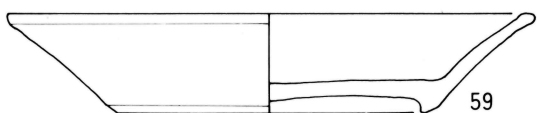
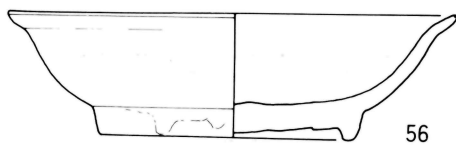
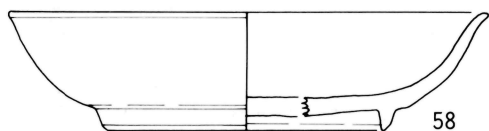
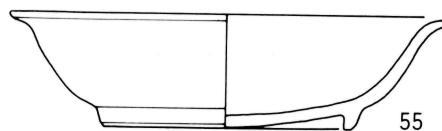
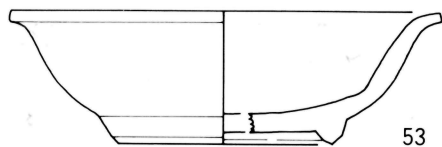
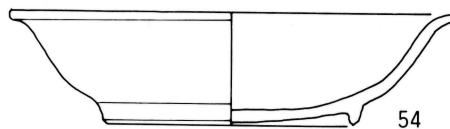
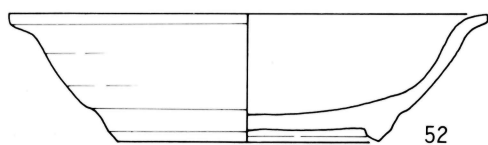
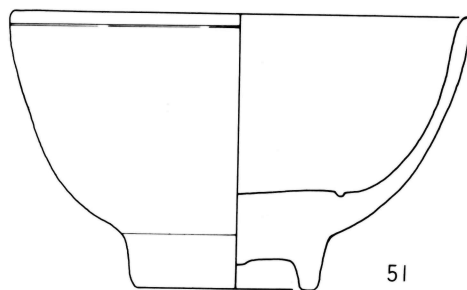
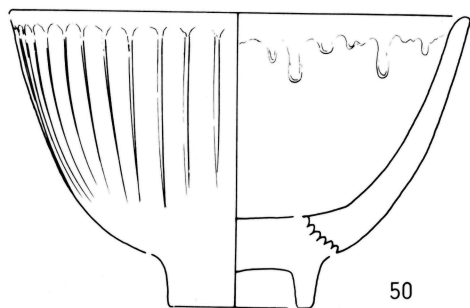
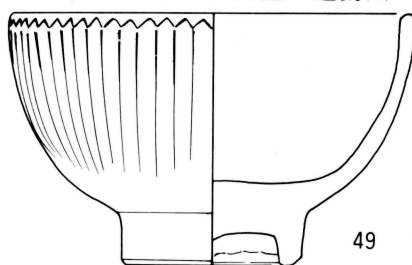
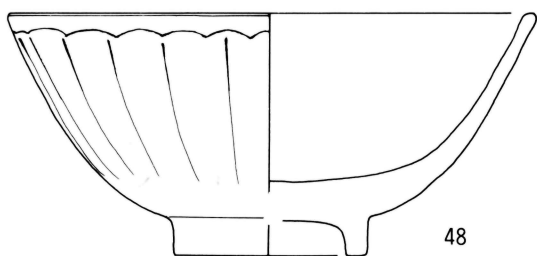
46

- | | | | |
|-------|------|-------|------|
| 34 | 天目茶碗 | 38 | 鉄釉德利 |
| 35・36 | 鉄釉皿 | 39 | 鉄釉小壺 |
| 37 | 鉄釉水注 | 40~46 | 灰釉皿 |



第9図

第35次調査・遺物(6)

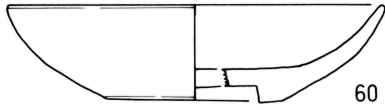


48~51 青磁碗 52~59 白磁皿

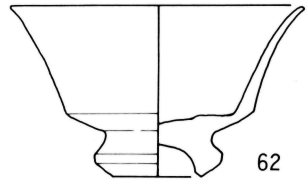
0 10cm

第10図

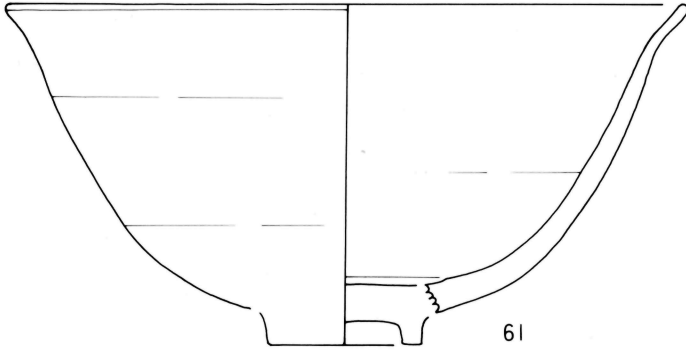
第35次調査・遺物(7)



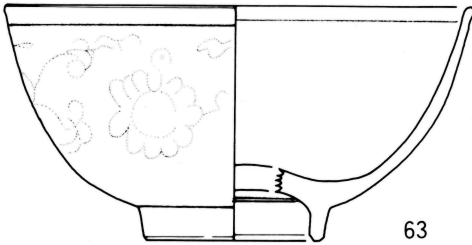
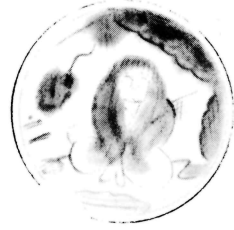
60



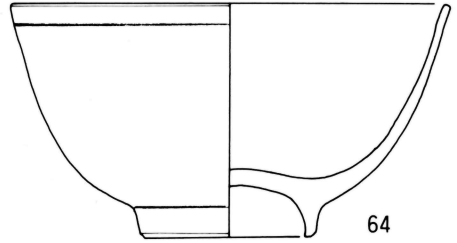
62



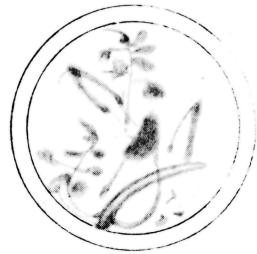
61



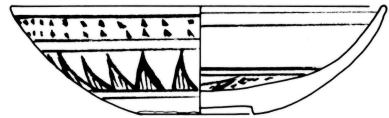
63



64



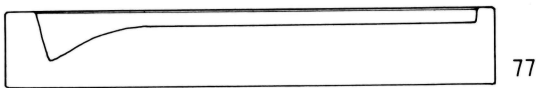
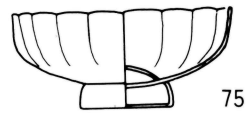
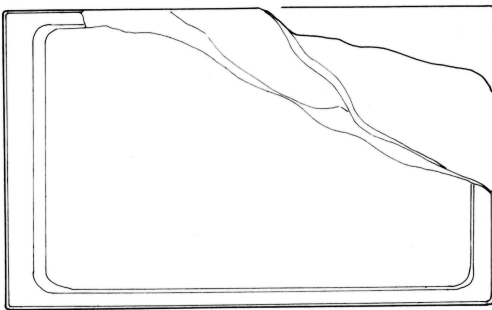
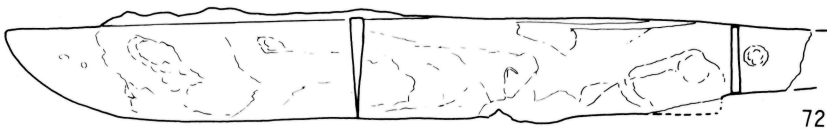
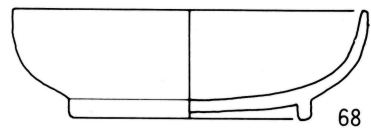
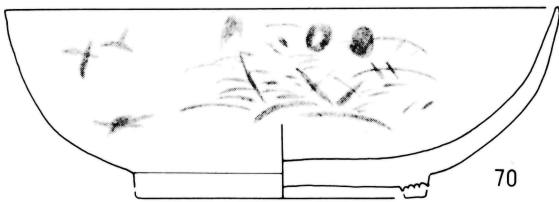
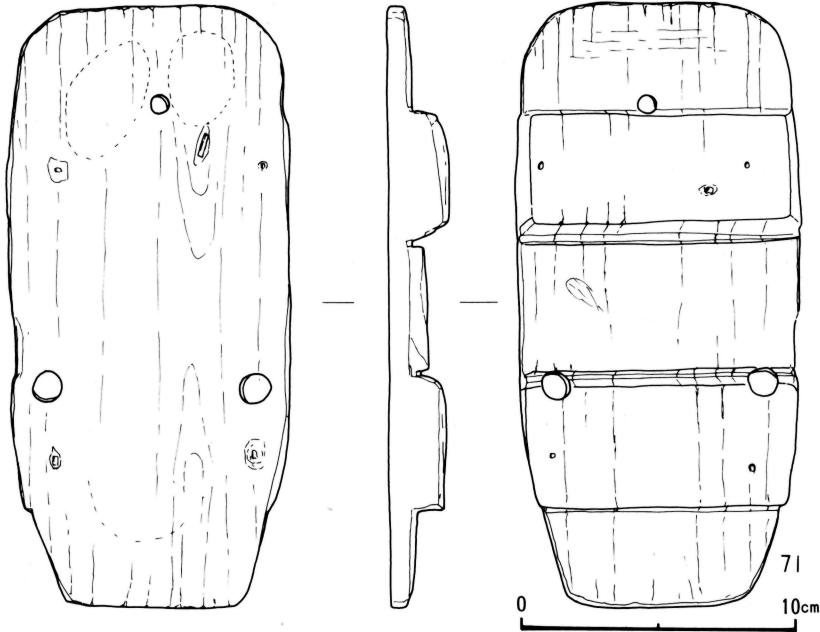
65



67

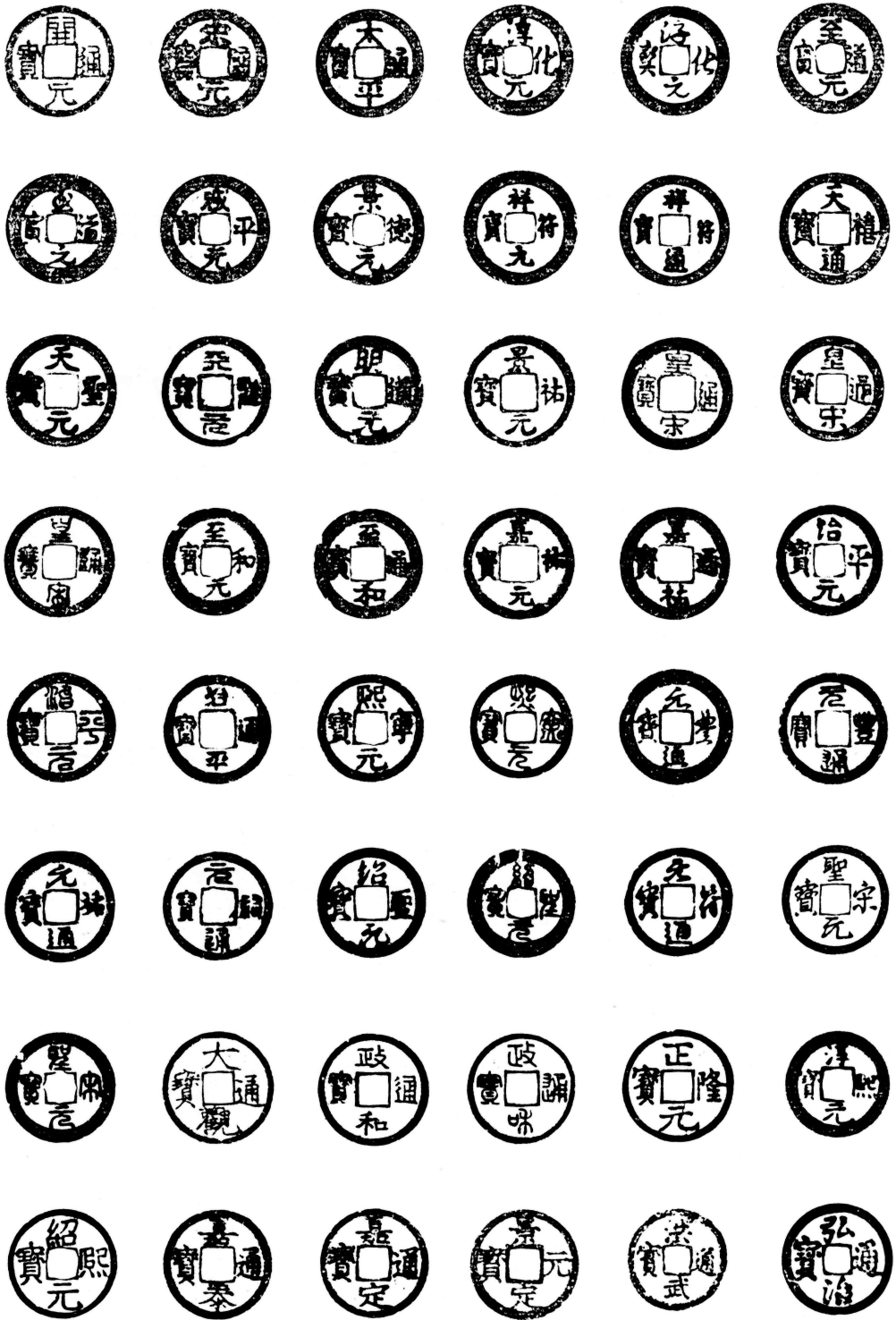
- | | |
|--------|-----------|
| 60 白磁皿 | 63・64 染付碗 |
| 61 白磁碗 | 65・67 染付皿 |
| 62 白磁杯 | |

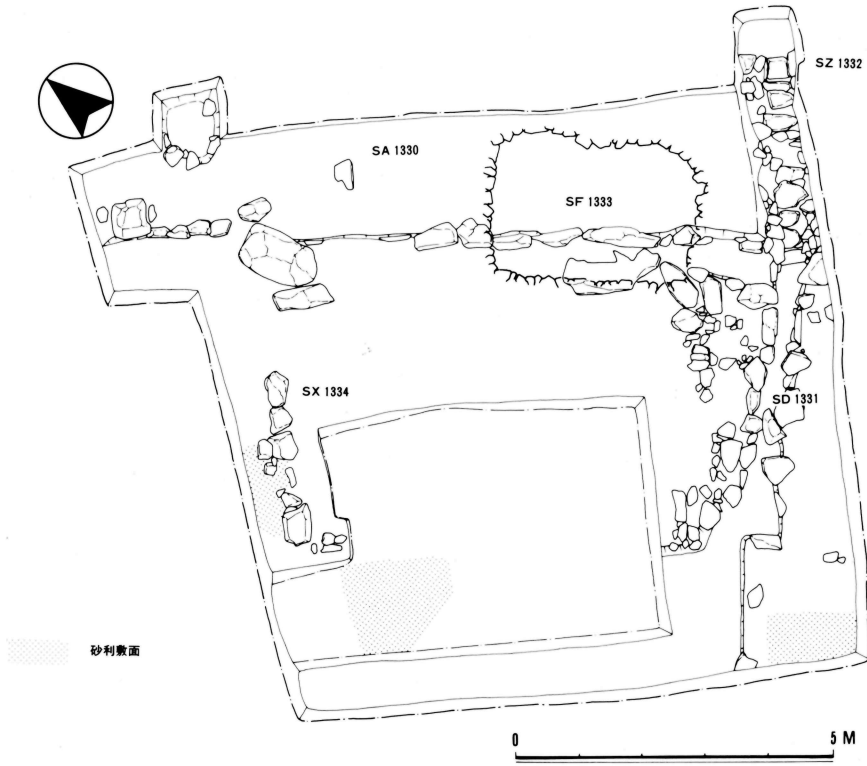
0 10cm



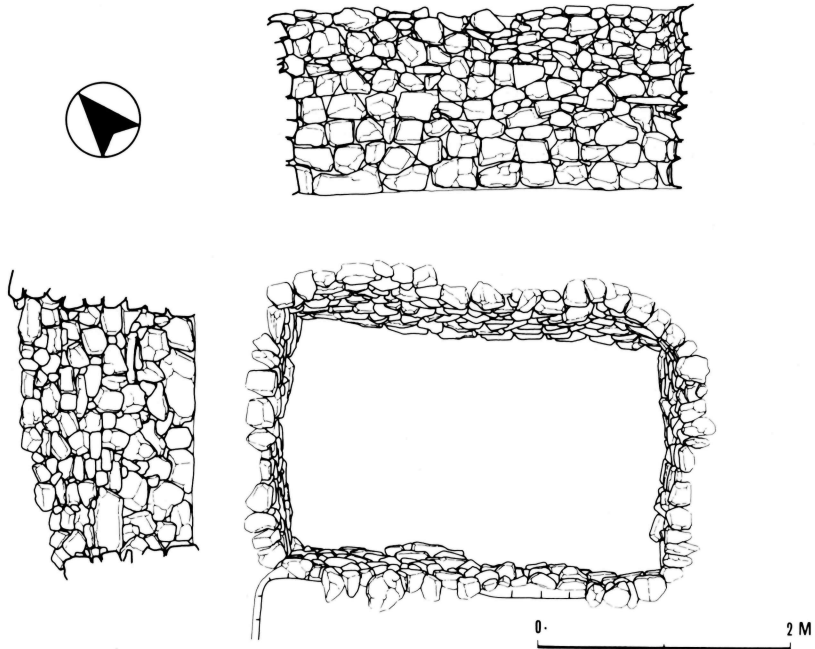
- | | | | | | |
|----|---|---|----|---|---|
| 68 | 漆 | 杯 | 72 | 短 | 刀 |
| 70 | 漆 | 碗 | 75 | 紅 | 皿 |
| 71 | 下 | 駄 | 77 | 視 | |

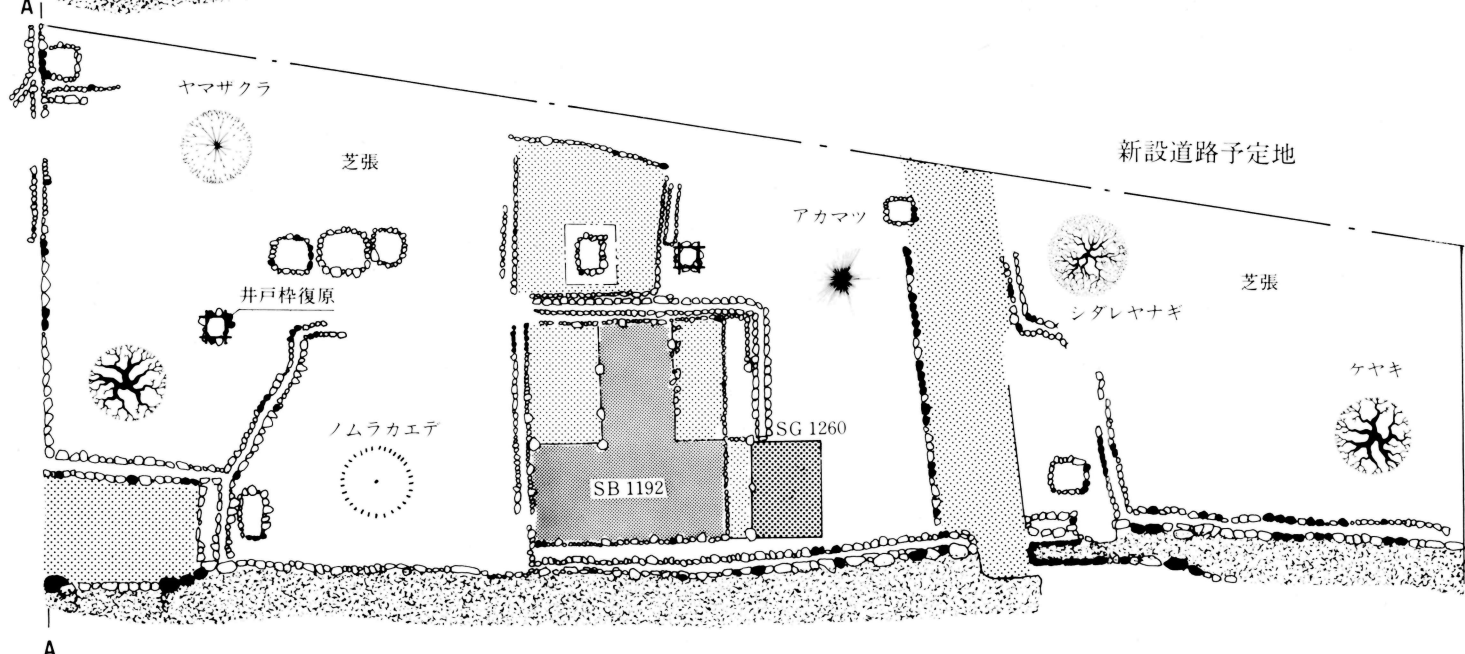
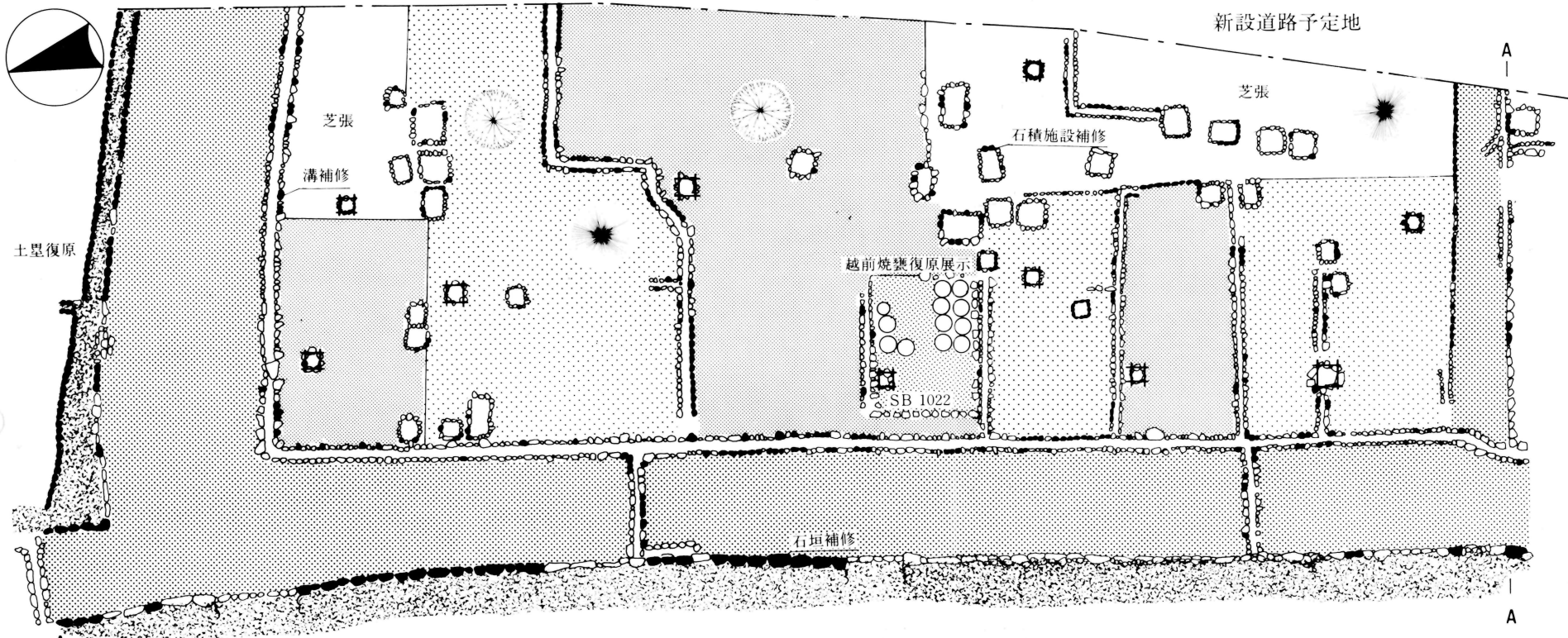
0 10cm





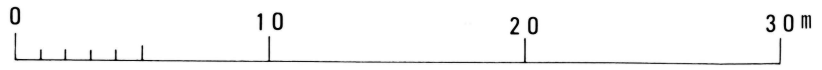
石積施設 S F 1333





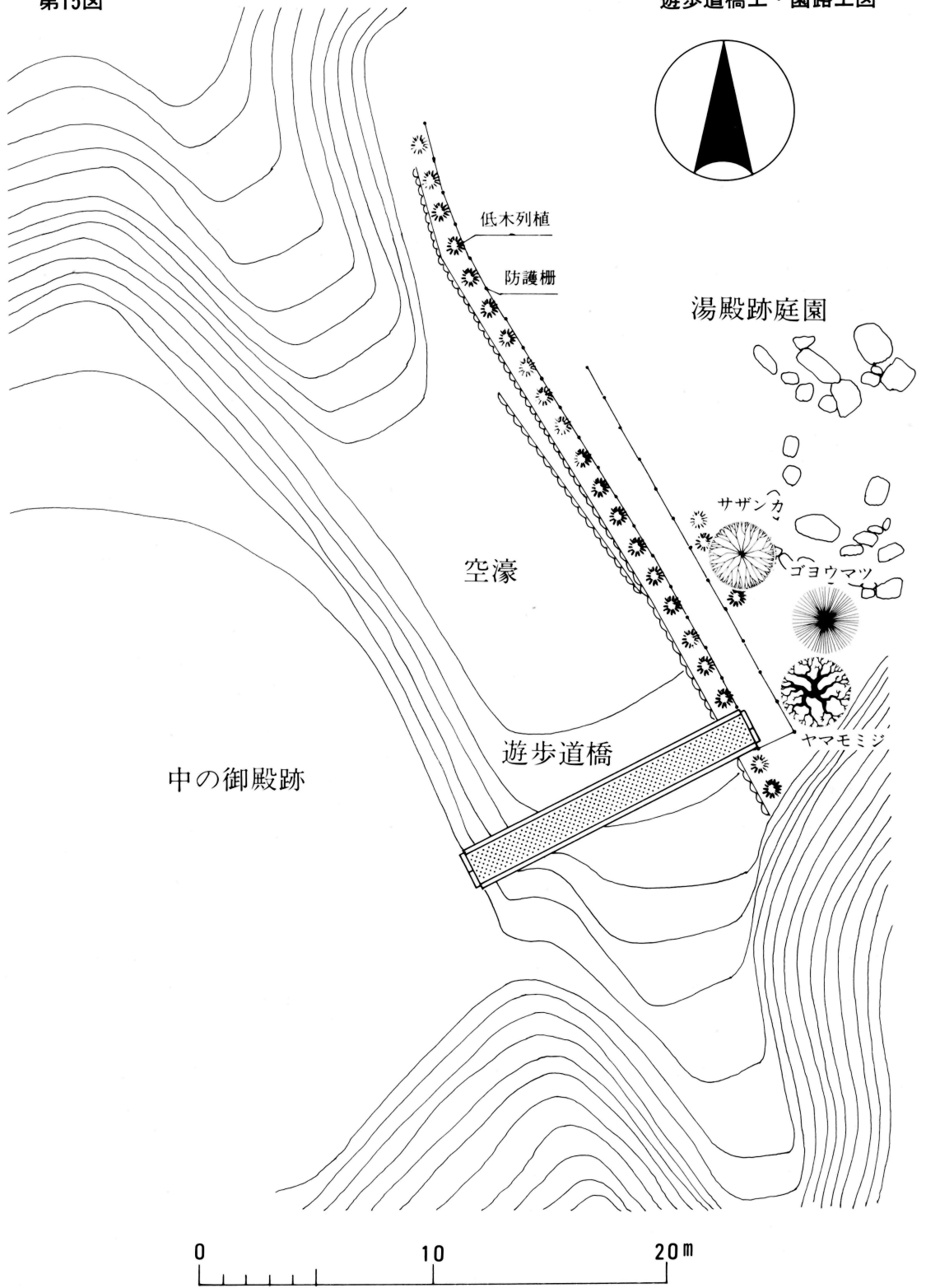
凡例

- 補充・修復石
- 道路跡砂利敷
- ソイルセメント基礎小砂利敷
- 砂利混りソイルセメント舗装
- ソイルセメント舗装
- 中庭小砂利敷
- アスファルト舗装
- 土塁表示芝張



第15図

遊歩道橋工・園路工図



舗装遺構の調査

はじめに

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査が開始されてから10年余を経過し、これまで館や家臣の屋敷、寺院、街路の跡など数多くの遺構が発掘されている。朝倉氏遺跡の場合、建物跡の礎石や溝石、石垣などはかなりよく遺存しているので、発掘後はほとんど露出展示することになっている。しかし大部分の遺構面はそのまま露出放置しておく、雑草や雨水による流出、見学者の歩行による損傷などによってかなり崩壊する恐れがあるので、芝張や砂利敷、砂利混りソイルセメント舗装などで覆って整備している。史跡の整備に際しては、できるだけ当時の姿を再現するよう留意しなければならないが、そのためには発掘調査資料や文献資料などを参考にして、整備材料や工法を検討する必要がある。

今回の調査は、発掘した舗装遺構の粒度や地耐力を調査、分析し室町時代の舗装実態の一端を明らかにするとともに、遺跡の環境整備に役立てることを目的として行ったものである。調査に際しては名城大学農学部中村研究室の桜井、大崎両君の全面的なご協力をいただいた。厚くお礼申し上げる次第である。

調査概要

1 調査地点

調査場所は福井市城戸ノ内町朝倉氏遺跡である。朝倉氏遺跡は、越前中央山地の西縁部近くに位置し、起伏量200~400m、山腹斜面の傾斜度20°~30°未満の小起伏山地と、足羽川の一支流である一乗谷川に沿って谷底平野をもった小さな壮年谷、右岸部の現河床との比高15m内外の段丘などからなる。調査はいずれも谷底の平地部に属する、一乗谷川東方60mの館跡と左岸に沿った武家屋敷、街路跡で行った。

調査地点No.10~12は松雲院の敷地で林地になっていたが、No.10、11は昭和43年6~7月にかけて、またNo.12は46年8月~47年3月にかけて、それぞれ50cm~1mの表土を除去発掘調査された。調査後No.11は43年度に、No.10は45年度に、No.12は47年



挿図4 舗装遺構調査地点図

度にそれぞれ遺構検出面に砂利を敷いて整備された。

No.1～9は、朝倉氏遺跡が国の特別史跡に指定された昭和46年頃までは、水田として耕作されてきたところである。しかし公有地化後は草地となっていた。No.9は52年5月～7月に、No.1～4、7、8は53年5月～10月に、No.5、6は54年9月～12月にかけて、それぞれ20～30cm厚の、耕土とその下の床土を除去発掘調査された。

2 調査日と天候

No.1～4、7、8は地耐力の調査を7月14、16、19日の3度行い、最終日に粒度分析用礫土を採取した。No.5、6、9～12は12月21日に行い、調査後粒度分析用礫土を採取した。

調査日と調査前日の天候は次のごとくであった。

7月13日、14日－くもり、15日－はれ時々くもり、16日、18、19日－はれ、12月20日－くもり時々はれ、21日－くもり後あめ。

なお舗装遺構の実測は、12月13日に36次発掘道路を、10月9、10日にその他の遺構を行った。

3 調査方法

(1) 地耐力調査

測定器具には、「衝撃式地耐力測定器 Model No.TS-196」を使用した。

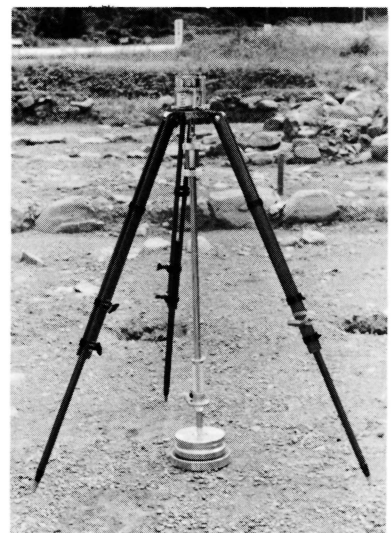
この測定器は、地耐力がK 30、5～30kg/cm²の場合は、重錘の使用落下高を30cmにするとういのであるが、はじめは地耐力が不明なので、地盤の柔らかそうなところは、使用落下高を10cmに、しっかりしていそうなところは落下高を30cmとして試験的に実施、その後本試験に移った。

測定は遺構面の平坦なところに器械を設置、一度に連続4回～15回ほど記録紙上のI値がほぼ一定になるまで、重さ10kgの重錘を径20cmの円形載荷板の上にくりかえし落下させて行った。落下試験後記録紙の目盛を測定、I値が2個以上連続して同一の値を示す部分、数箇所の平均をとって、その調査時のI値とした。さらにI値とK値の関係グラフからK値を求めた。第5表の地耐力は同一地点で数度行った地耐力測定値の平均である。

また土中含水率の調査への影響の有無を確認するため、地耐力を測定の都度、調査地点近くの土砂をビニール袋に採取持帰り、含水量を測定した。

(2) 粒度分析調査

舗装遺構の礫と砂・シルト・粘土の重量比また礫の粒別重量割合を知るため、JIS-A-1204に準じて、ふるいにより粒度分析を行った。礫が多いことなどから、フルイ目は、JIS-2-8801の中のコンクリート骨材調整の組合せとした。



挿図5 衝撃式地耐力測定器

第5表の粒度分析の資料は、地耐力を調査した部分の礫土である。落下試験により地盤が沈下、載荷板の範囲の地面がくぼむが、その部分の表層3cm厚ほどの礫土を移植ゴテで採取、分析した。なおNo.3とNo.8では遺構表面下3～6cm、6～9cmの下層、2層についても礫土を採取分析した。

第3表は、平庭S G 829の花崗岩小礫とS G 1260の小玉砂利敷のよく残存している代表的部分に30cm角の範囲を設定し、小玉砂利や小礫一層（約1個分の厚さ）を拾いあげ分析したデータである。花崗岩の小礫の中には、山石の小片もまじっていたが、それらはすべてとり除いて粒度分析を行った。なお第5表のS G 829No.9の資料についてはこのような操作をしていない。

第5表に示す礫の長径は、ふるい網目を通過する短径に対して直角方向の長径の長さをノギスを用いて測定、平均したものである。4・76～9・52mmの礫は、4分法により測定個数を減じたので、全個数の平均ではないが、その他のものはふるいに残った全個数の長径を測定、平均したものである。第4表の小玉砂利は、4・76mm以上のふるいに残留した礫のすべてについて短径、長径を測定し、短径の同じものをひとまとめにし、長径はそれらの長径を平均したものを記載してある。

(3) 遺構実測図作成

各舗装遺構の代表的な部分を選定し、原寸で実測した。実測地点と地耐力調査地点を一致させればよかったが、ほんのわずかの傾斜でも載荷板が移動し、安定した面を求めていかなければならず、実現は困難と思われた。

実測は、遺構面上に直接透明なガラス板を置き、その上にマイラー用紙をのせて、直視しながら礫の輪部を鉛筆でトレースする方法をとった。

調査結果と考察

1 地耐力調査

道路遺構の地耐力は、No.3を除いて14～19kg/cm²とかなり大きい。砂層20cm+(鉋滓+目潰土)20cm=40cm厚のローラー転圧仕上路盤面にほぼ匹敵する。どのような転圧方法がとられたか不明であるが、なんらかの締め固めが行われたと推定される。それは遺構面の観察からもいえる。10cm以上の角礫が平にすわっているが、人々の往来による踏みならしで多数の礫がそのようになったとは考えにくい。

朝倉氏遺跡では、すくなくとも三度の遺構群の造営時期が確認されており、その度に道路なども嵩上げされて使われている。ふるい道路面に10数センチ礫土を整地して、新しい道路を造成している。一種のステージコンストラクションの施工方法といえる。



挿図6 S G 1260基盤断面

中庭の地耐力は弱く、軽く転圧されたローム質自然土面に近い値である。ほとんど転圧は行われなかったのではないかと推察される。S G 1260の基盤断面をみると、20cm厚ほどの栗石層が確認できるが、空隙が多く突き固められた状態ではない。地盤強化よりも排水に重点をおいたのかもしれない。塑性路盤においては、衝撃式によるK値が載荷試験によるK値より小さく出る傾向があり、No.9の数値は実際より多少低くでている可能性がある。

No.10、11、12は館跡の遺構検出面に砂利を一層しいて、10年間ほど見学者の園路として利用してきたところである。地耐力はそれぞれNo.10—8kg/cm²、11—16kg/cm²、12—7kg/cm²で、No.11が大きい。この地点は、館を造成する際山裾を削平して造成された所で、固い地盤の影響を受けているとみられる。他の2箇所は、武家屋敷の中庭の地耐力とほぼ同じである。見学者の踏圧の効果はすくないようであるが、名城大学の前庭での調査によれば、同じように整地造成したところでも、人通りの激しい所では、地耐力が増加することが判明している。土壌条件にもよると思われるが、ひんぱんに人が通る所の地耐力は13.5kg/cm²、ほとんど通らない所は6.2kg/cm²の数値であった。

含水量もあわせて調査したが、地耐力との相関関係はみられなかった。

2 粒度分析調査

道路遺構の表層は、礫が主要舗装材料になっている。重量割合で76%~97%と大きな比重をしめる。道路表面の土砂が一部、降雨で流失した可能性もあるが、道路にはかなり密に礫がしきつめられており、元々目潰の土砂はすくなかったと思われる。礫を多くし、雨の日にくかるむことのないように配慮したことが、十分考えられる。道路舗装の礫は、どちらかというとも玉砂利より角礫に近い形のものが多い。大きさは、10cm以上もある大きな礫もあり様々である(第16図)。No.5を除いて最大の重量割合をしめる平均長径は、No.1—24mm、No.3—25mm、No.4—33mm、No.2—34mm、No.6—50mmである(第5表)。実際の整備には、長径2.4cm~5cm位の礫を使用するのが望ましいといえる。

No.6の採取した礫土の中には、土師質土器片と炭化物が少量検出された。ある時期の建物群の廃絶後、その附近の土砂も一部使用、道路工事が行われたことを物語っている。No.3、8においては、3層の礫土を分析したが、表層の第一層が礫が最も多かった。

平庭には、道路の礫などと異なるきれいな小玉砂利や花崗岩小礫が化粧敷されていたが、当時の人々のすぐれた美意識がしのばれる。

花崗岩小礫は、2.38mm~4.76mm間の粒径のものが、重量比で77%と大部分をしめる。ふるいなどをつかって、選別した可能性がある。

小玉砂利の最大の粒径は20×23mmとかなり小さい。礫を楕円体と仮定して、それらの長径方向に中心を切る断面積の総和が最大となる礫は、12×16mmのものである。短径8~16mm、長径11~20mmの礫が面積比で89%をしめ、小玉砂利敷の主要構成材料である。

おわりに

CBR試験などによる大規模な調査は、遺構を破壊する恐れがあり遺跡には採用しがたく、貴重な遺構上での地耐力調査には限界があるといえる。しかし衝撃式地耐力試験でもかなりの信頼度で地盤の強度を推定できたと思われる。道路遺構は、ある程度の強度をもつことが判明したが、中庭などは軟弱な地盤のようで、遺跡に構造物を造成する際は、厚い碎石層や砂層などによって遺構を保護養成する必要があるだろう。

室町時代においても、庭に砂を敷くことがよく行われていたことが推察される。蔭涼軒日録の延徳3年11月22日の条に、白砂を三兩入、これを河原者二人で庭に撒いたという記載がある。朝倉氏は京都の公家や僧侶との交流もあり、京都の庭の事情にも通じていたから、そのような花崗岩小礫を用いた枯山水庭の出現も当然であったといえよう。京都などの庭の白川砂(小礫)は後世補充されたものばかりで、朝倉氏遺跡のように、400年以前の庭砂(小礫)や小玉砂利が遺存していた例はきわめて稀である。

この度は、花崗岩小礫や小玉砂利、道路の礫などの岩石の種類や産地を同定できなかったが、今後はそれらも解明するとともに、今回の調査結果もあわせて参考にし、朝倉氏遺跡の環境整備の一助としたい。

第3表 花崗岩小礫・小玉砂利粒度組成(重量比)

フルイ目mm 残留—通過	SG 829 花崗岩小礫			SG 1260 小玉砂利		
	重量 g	重量比%	個数	重量 g	重量比%	個数
12. -19.10				159.5	20	38
9.52-12.70	4.72	1	3	358.6	45	160
4.76- 9.52	83.90	19	256	270.0	34	305
2.38- 4.76	330.90	77	5018	6.5	1	88
2.00- 2.38	7.50	2	425	0.5		32
1.19- 2.00	5.03	1	650			

第4表 小玉砂利粒径と面積比

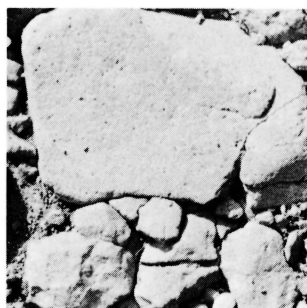
短径 mm	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	20
平均長径 mm	10	9	11	11	13	14	15	16	17	17	19	20	19	21	23
個数	8	31	38	51	61	68	71	69	40	16	15	23	5	3	4
総面積 cm ²	3	14	21	35	56	72	91	105	67	25	34	57	13	9	14
面積比 %	1	2	3	6	9	12	15	17	11	4	6	9	2	1	2

第5表 遺構各部の粒度と地耐力

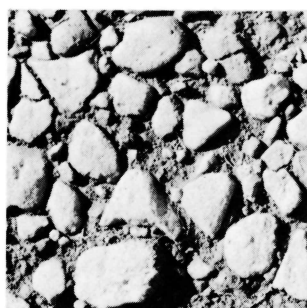
遺構分類		道 路						中 庭		
遺構番号		S S 975	S S 976	S S 976	S S 977				SG1260	S G 829
調査地点		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9
全体重量割合	礫 2000 μ 以上	994g 76%	986g 76%	1020g 72%	1720g 94%	2801g 97%	1468g 88%	1141g 66%	850g 65%	304g 36%
	砂 74 μ ~ 2000 μ	115g 9%	140g 11%	173g 12%	58g 3%	37g 1%	82g 5%	181g 10%	251g 19%	151g 18%
	シルト粘土 74 μ 通過	207g 16%	174g 14%	222g 16%	44g 2%	64g 2%	110g 7%	406g 24%	208g 16%	395g 46%
礫粒径別重量割合と平均長径 (下段・★礫一個)	50.8mm 以上					71.3% ★173mm	15.7% ★99mm	39.9% ★85mm		
	38.1 ~ 50.8mm		10.6% ★55mm		16.4% 84mm	8.5% 92mm	5.9% ★59mm		13.2% ★74mm	
	31.7 ~ 38.1mm	7.1% ★67mm	6.4% ★55mm		9.9% 69mm	6.8% 74mm	14.3% 56mm			
	25.4 ~ 31.7mm	10.6% ★51mm	13.8% 46mm	22.4% 44mm	13.6% 41mm		25.7% 50mm	18.8% 55mm		
	19.1 ~ 25.4mm	15.8% 32mm	23.5% 34mm	22.6% 34mm	20.6% 33mm	3.6% 35mm	8.8% 35mm	10.3% 34mm	10.0% 37mm	
	12.7 ~ 19.1mm	32.5% 24mm	19.7% 24mm	27.7% 25mm	17.8% 25mm	4.3% 24mm	14.0% 26mm	13.1% 24mm	18.9% 20mm	6.5% 29mm
	9.52 ~ 12.7mm	15.2% 17mm	11.8% 17mm	10.6% 16mm	9.1% 17mm	1.2% 17mm	4.9% 17mm	5.2% 18mm	24.8% 17mm	1.8% 17mm
	4.76 ~ 9.52mm	14.4% 9mm	10.2% 9mm	11.6% 10mm	9.8% 11mm	2.7% 10mm	7.8% 10mm	8.8% 10mm	27.0% 12mm	17.8% 9mm
	2.38 ~ 4.76mm	4.0% 4.76mm	3.5% 4.76mm	4.6% 4.76mm	2.3% 4.76mm	1.3% 4.76mm	2.5% 4.76mm	3.4% 4.76mm	5.4% 4.76mm	65.6% 4.76mm
	2.00 ~ 2.38mm	0.4% 2.38mm	0.5% 2.38mm	0.5% 2.38mm	0.5% 2.38mm	0.3% 2.38mm	0.4% 2.38mm	0.5% 2.38mm	0.7% 2.38mm	8.3% 2.38mm
地 耐 力	16 kg/cm ²	14 kg/cm ²	11 kg/cm ²	14 kg/cm ²	17 kg/cm ²	19 kg/cm ²	7 kg/cm ²	7 kg/cm ²	4 kg/cm ²	



第36次発掘道路



S S 977



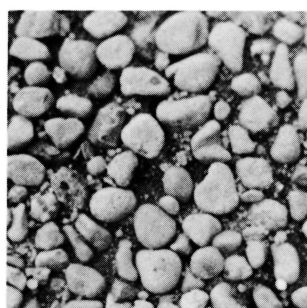
第36次発掘道路



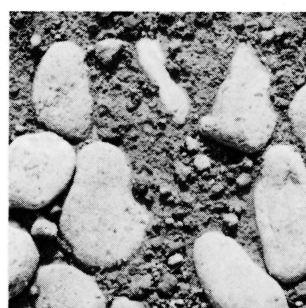
S S 976



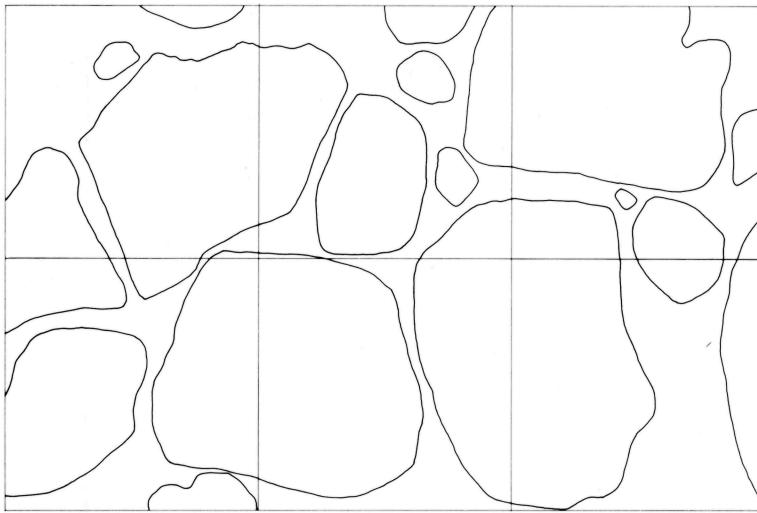
S E 1035 北側



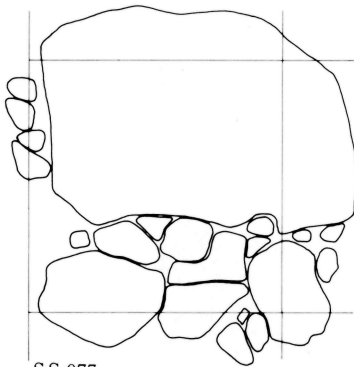
S G 1260



S D 998 南側



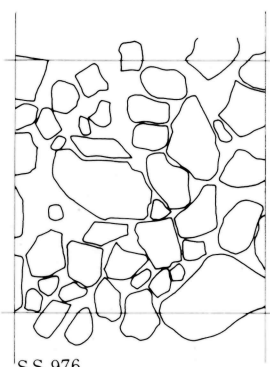
36次発掘道路



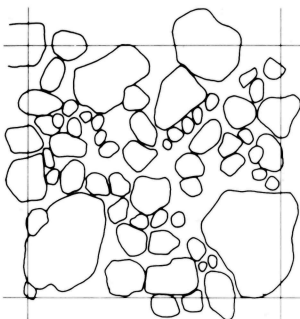
SS 977



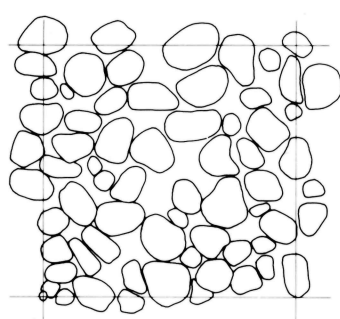
36次発掘道路



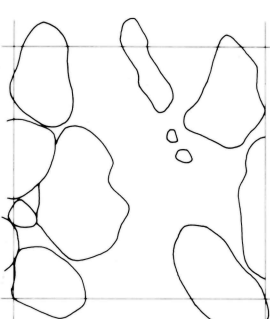
SS 976



SE 1035北側



SG 1260



SD 998南側





第29・30次調査地 北から



第36次調査地 南から



ツグミ



トラツグミ



ヒヨドリ



メジロ



ヤマガラ



コゲラ

鳥類生息調査

まえがき

本報告書は、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の周辺（一乗城山）に生息する野生鳥獣の実態を調査し、自然環境とのつながりを考察するために朝倉氏遺跡調査研究所の依頼を受けて実施、結果をまとめたものである。

就中、鳥類が生息する種類や個体数の状況は自然環境の影響を受けることが大きく、植生や林相に対して指標性を持つものであるため、この点も生息と関連づけて考察した。さらに渡り鳥のように季節による出現の差や留鳥における繁殖期と秋冬の生息状況の違いからも本地域の特性を鳥相によって考察した。

1 調査内容

(1) 鳥類

調査ルート地域に生息する鳥類の種類や状況について調査し、自然環境が鳥類の生息にどのような影響を及ぼしているか、また、森林相をどう維持改善していくかについての資料としての第1次の調査である。もちろん、現状における調査であって鳥類の生息状況がどのようであれ、現況の維持改善を要求するものではなく、可能な限り忠実に鳥類の生息状況を把握するものである。

(2) その他の生物

鳥類とともに生息する他の生物（獣類・爬虫類・両生類・昆虫）等についても記録されたものについては資料として、深い注意ははらわなかったが主なものについて記録することとする。

2 調査方法

移動性の鳥類であり、1日の活動も時刻によって差異があり、その確認は多分に遭遇性のものであるが活動の盛んな早朝より開始した。

- (1) 定線調査の手法による速度1.5Km/時によって実施し、鳴き声が確認の便りとなるがこの速度は立ち止まり双眼鏡による観察を含む。
- (2) 定線調査法による範囲は、定線ルートの左右25m以内のみの出現を対象として生息密度の算定規準としているが、本調査では見聞するすべての鳥類の種類・数・性別・繁殖状況等について調査する。
- (3) 記録については、出現順に記録し、天候・時刻・標高・植生および林相等の関係把握の資料とし、さらに、渡り別・種類別の統計を求め考察する。

3 調査時期

この選定にあたっては、繁殖期、冬鳥夏鳥の移動期、定住越冬期等季節的、時間帯等を考慮

して決定した。

(1) 繁殖期 4月～7月(3回) (2) 移動期 11月 (1回) (3) 越冬定住期 1月 (1回)

実施日は下記のとおり

調査日	年月日	時間	備考
第1回目	昭和53年11月19日	7:00～12:00	移動期
第2回目	昭和54年1月4日	10:00～14:00	越冬定住期
第3回目	昭和54年4月5日	7:00～12:00	繁殖期
第4回目	昭和54年5月20日	6:00～12:00	繁殖期
第5回目	昭和54年7月15日	7:00～12:00	繁殖期

4 調査日の気象データー

日	時	風向	風速 (m/S)	気温 (C)	天候
53 年 11 月 19 日	7時	NE	1.3	14.8	雨
	8	—	0.1	15.0	くもり
	9	SW	1.2	15.5	〃
	10	SE	1.0	16.0	雨
	11	WSW	1.9	14.2	くもり
	12	—	0.0	14.7	〃
54 年 1 月 4 日	7	SSE	1.6	4.2	雨
	8	SSE	1.9	4.4	〃
	9	SW	2.7	4.9	〃
	10	SW	2.0	5.7	くもり
	11	SSW	2.6	7.7	〃
	12	S	1.1	8.7	〃
54 年 4 月 5 日	7	SSE	0.4	4.1	くもり
	8	SSE	0.4	4.6	〃
	9	S	1.9	5.7	〃
	10	—	0.0	7.3	〃
	11	S	0.9	8.3	〃
	12	SSE	1.8	9.7	〃

54 年 5 月 20 日	7	S	2.4	13.0	晴
	8	SSE	2.4	15.0	"
	9	SSE	2.4	17.6	"
	10	S	2.2	19.2	快晴
	11	S	2.4	19.6	晴
	12	NNE	2.5	20.0	"
54 年 7 月 15 日	7	—	0.0	23.2	くもり
	8	—	0.0	24.2	"
	9	SSW	1.1	24.9	"
	10	SSE	1.5	24.4	雨
	11	SSE	3.0	25.3	くもり
	12	NW	3.6	26.8	"

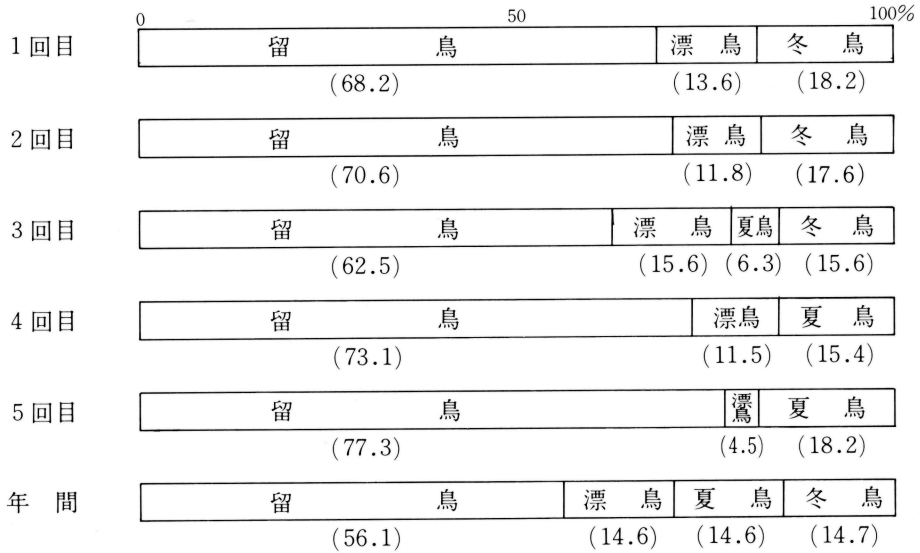
5 調査結果

(1) 鳥類種類別集計

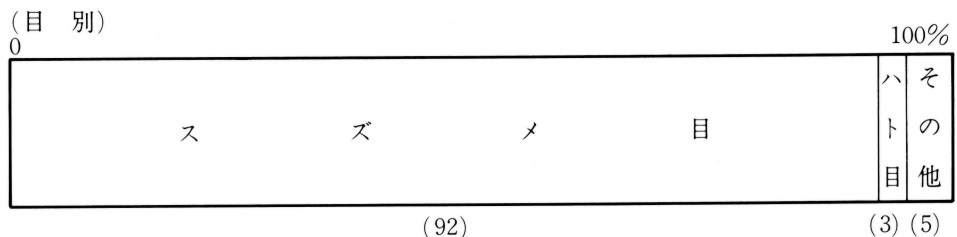
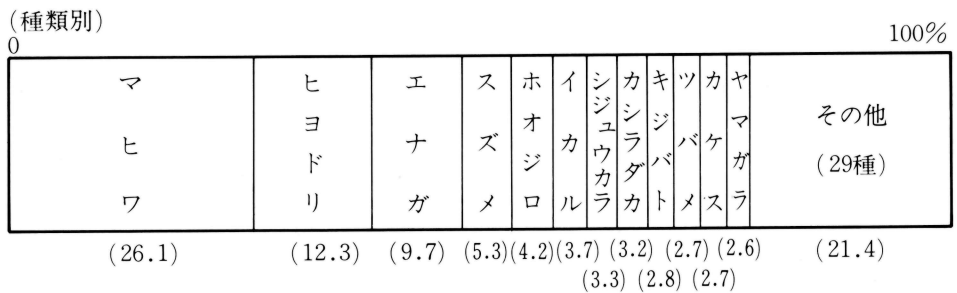
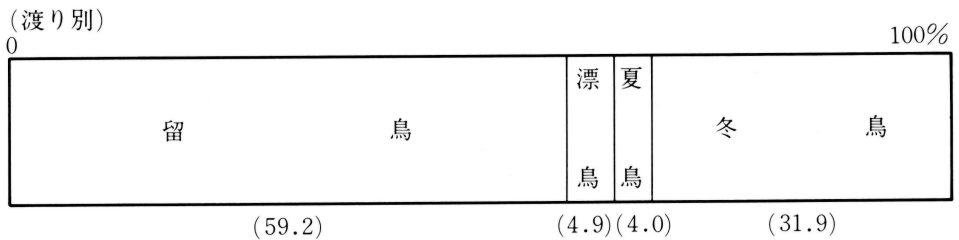
No.	目科名	種名	渡り別	個 体 名						備 考
				1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	計	
1	スズメ目 カラス科	ハシブトカラス	留鳥	1					1	村落内
2		ハシボソカラス	"	7	4	1	3	2	17	"
3		カケス	"	3		10	6	4	23	
4	ハタオリドリ科	スズメ	"	9		3	18	15	45	村落内
5	アトリ科	イカル	"		15	1	9	6	31	
6		カワラヒワ	漂鳥			4	6		10	
7		マヒワ	冬鳥		50	170			220	集団移動
8		ウソ	漂鳥	2		5			7	
9	ホオジロ科	アオジ	"	2	2	4			8	
10		ホオジロ	留鳥	4	1	7	10	13	35	
11		カシラダカ	冬鳥	3		24			27	
12	セキレイ科	ビンズイ	漂鳥				1		1	
13		セグロセキレイ	留鳥	3	1	1		2	7	村落内

14	メジロ科	メジロ	留鳥	2		5	3	3	13	
15	シジュウカラ科	シジュウカラ	"	14	3	6	1	4	28	
16		ヤマガラ	"	7	3	6	4	2	22	
17		ヒガラ	"		6	2	1		9	
18	エナガ科	エナガ	"	40	30	9	2	1	82	
19	モズ科	モズ	"			2			2	
20	サンショウクイ科	サンショウクイ	夏鳥					1	1	
21	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	留鳥	4	11	11	39	39	104	
22	ヒタキ科	キビタキ	夏鳥				2	2	4	
23		オオルリ	"				1		1	
24		ウグイス	漂鳥			3	3	2	8	
25		ヤブサメ	夏鳥				2	2	4	
26		トラツグミ	留鳥			2	2	1	5	餌運び (ミミズ)
27		シロハラ	冬鳥	3		4			7	
28		アカハラ	夏鳥				1		1	
29		ツグミ	冬鳥				2		2	
30		ルリビタキ	"	7	1				8	
31		ジョウビタキ	"	2	1	1			4	
32	ミソサザイ科	ミソサザイ	漂鳥	1	2	4			7	
33	カワガラス科	カワガラス	留鳥				1		1	村落内 河川
34	ツバメ科	ツバメ	夏鳥				2	2	19	村落内
35	キツツキ目 キツツキ科	アオゲラ	留鳥				1	3	4	
36		コゲラ	"	2	4	2	3	4	15	
37	ワシタカ目 ワシタカ科	トビ	"	1	2	2		5	10	
38	コウノトリ目 サギ科	アオサギ	"				1	2	3	村落内
39	ハト目 ハト科	キジバト	"	11		7	3	3	24	
40	キジ目 キジ科	キジ	"				1		1	平坦地
41		ヤマドリ	"	3	2	5	3	2	15	
合計 6目20科		41種 (不明種2)		羽 131	羽 138	羽 308	羽 130	羽 136	羽 843	

(2) 渡り別構成比 (%)



(3) 年間優占度表



(4) その他の生物

昆虫類は11月、1月にも小型のものが認められた。ガの仲間のようなものである。目立ったものに次の2種類がある。

ニホンリス（リス科）別名キネズミ

安波賀への下り280mの標高地点でアカマツの8mくらいの枝上で見える。県内では針葉樹林に住むが数は多くないようである。昼行性。2～3月に交尾し、4～6月に2～6子を分娩するのが普通で、海拔2700mまでの垂直分布域で見られる。球果、木の芽、若葉、樹皮、昆虫、小鳥の卵やヒナも捕食する。（11月調査時）

タゴガエル（アカガエル亜科）

5月調査時不動清水流水地域の100mほどにわたって枯杉葉やくさむらの中と二の丸南側谷合でサギの幼鳥に似た喧鳴を聞く。調査員は、敦賀市西方岳、今庄町岩屋、武生市日野山の同じような条件のもとでの喧鳴を聞いている。

モリアオガエル

諏訪館跡庭園の池の上にあるヤマモミジの大木の枝に産みつけられた本種の卵塊は以前にも何回か見ている。5月調査では卵塊は確認できなかったが体長12mmばかりの数多くのオタマジャクシを見る。時期的、場所的にみて本種と考えられる。大野郡刈込池（標高1000m）をはじめ、平地山麓の池沼や水溜りで繁殖しているがあまり多くないようである。人目に顕著なカエルの産卵としては一番遅く6月中下旬にも見られる。

6 植 生

経済林としてもよく手入れされており、山麓付近は立派な杉の成木林が占め、植林は中腹以上の標高400m付近まで及んでいる部分もある。森林性鳥類の生息環境としては夏緑広葉樹林、針葉樹林の林帯の混交や樹林自身の混交された成木林が適当といわれているが、本調査地においては一部に樹木の混交をみるし、本丸～三の丸のコースはコナラ、クヌギの成木が樹冠をなす優れた自然林と考えられる。また、下りコースの安波賀道もアカマツとの混交林やコナラ、クヌギの大木を持つ自然林が続き、秋の落葉時は足が埋まるほどで、ドングリの落果も見事である。観察コース順の植生は次のとおりである。

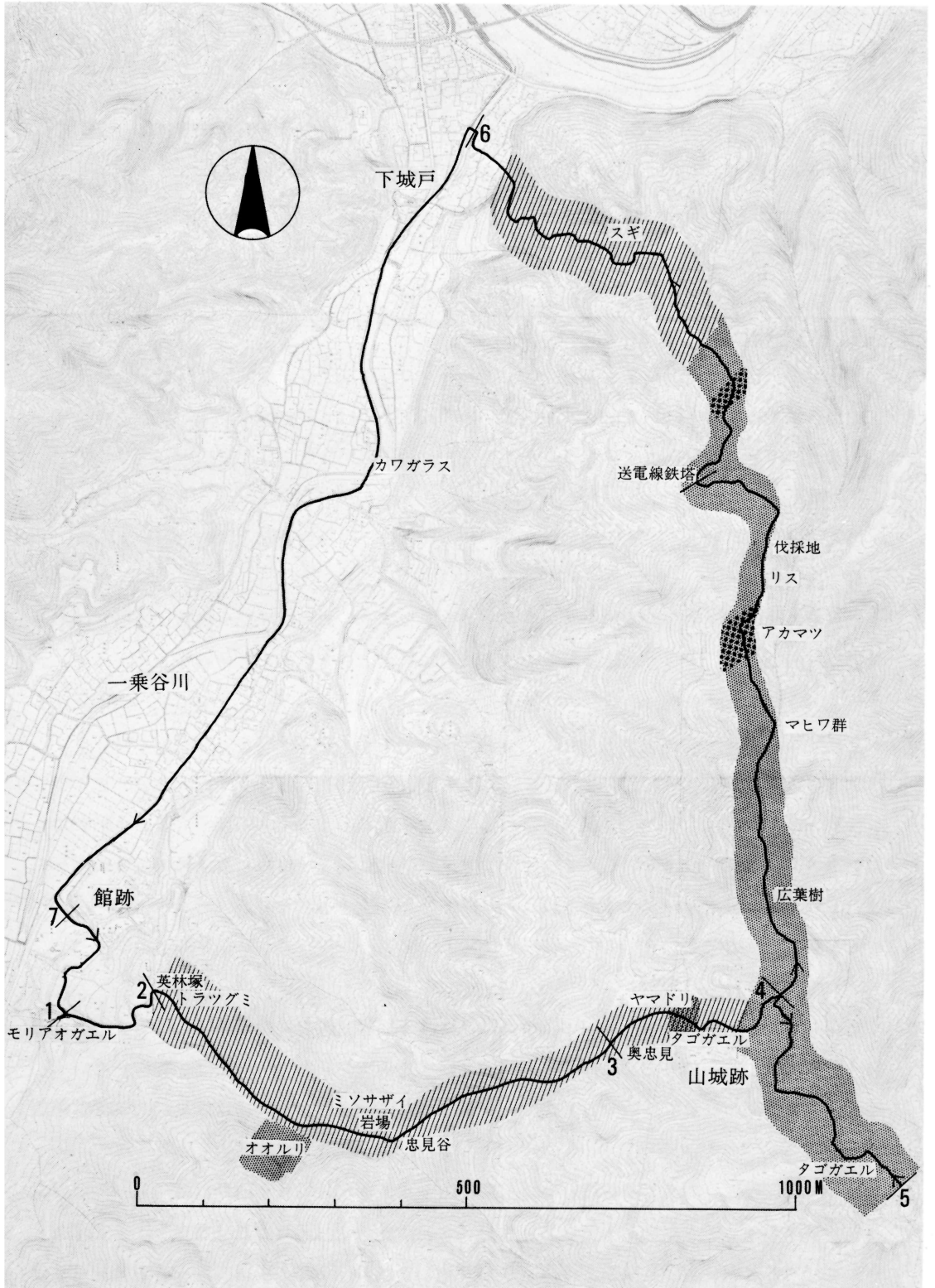
(1) 起点（事務所前）～諏訪館跡

芝生で整地された開豁な遺跡でまばらに植栽もされているが、全体としての林縁部とみることができるといえる。

(2) 英林塚（90m）～忠見谷（180m）

杉の成木林で暗い林床にシタ類ハエドクソウ等の下生えを抜けて谷川沿いに出ると斜面にケヤキ、シラカシ等の広葉樹が少しばかり残り、対斜面は落葉高木林となっている。150m付近は林間の広い岩場でよい水場ともなっている。

観察コース略図



(3) 奥忠見 (320m) まで

登山道に沿っては中令程度の杉、左右の斜面は割合に開けており落葉木の疎林となり、奥忠見では径20cmの密生杉林となっている。

(4) 奥忠見から三の丸への分岐点まで

送電線が交叉する坂道を過ぎるとコナラの成木林の狭小な平坦地となり建物跡のようで不動清水に至る間は杉、本丸の平坦地も杉植林で、ここが杉林の終わりとなる。

(5) 分岐点から三の丸 (470m) まで

コナラ、クヌギ、イヌシデを樹冠とするいわゆる雑木の自然林でオオバクロモジ、ハウチワカエデ、コバノガマズミ等の下層木を有する深さを感じる林が続く。

(6) 安波賀道

分岐点からは落葉樹が続き300m付近でアカマツの混じるアカマツ、コナラ林となり、下って北側斜面は皆伐幼令杉林、南側は自然林、200m付近で再びアカマツ老令が混じるクヌギ、コナラ林となる。送電線が交叉するあたりから10~20年の杉林となり県道に至る。

(7) 村落道

県道に出た地点にホタル養殖池があり、山麓の林縁部と村落内を起点にいたる。

7 食餌植物

昆虫類の幼虫や成虫その他の小さな生き物は重要な食餌であるが季節や種類によって植物も重要な食餌となる。本調査で確認したものを列挙すると、イヌツゲ・ヒサカキ・リョウブ・シラカシ・ウワミズザクラ・ウラジロノキ・ナンキンナナカマド・コバノガマズミ・サルトリイバラ・アズキナシ・アカマツ・カラスザンショウ・ヌルデ・ヤブツバキ・ヤマモミジ・ウリカエデ・ゴンズイ・ナツハゼ・ソヨゴ・ヒメアオキ・ムラサキシキブ・クサギ・シロダモ・ヤブコウジ・ミヤマフユイチゴ・コシアブラ・ニワトコ等木本の他に雑草の種子も豊かと思われる。ただ積雪期にも実をつけているイヌツゲ・ヒサカキは成育および数量ともに他の地域に比して優れているとは言えないようである。

8 調査結果の考察

(1) 生息密度と繁殖予測

悉皆調査法で実施したが、地形および林相の繁みの関係で遠方の記録は割合に少なく、定線調査法によるルート内の左右25m内の観測値と類似する予想のもとで生息密度を算出したい。しかし、密度が高い低いを比較する基礎データは本県には未だなく、環境庁指定の基礎定線調査資料がある。

繁殖の確認はトラツグミの餌運びとコゲラの営巣穴、カケスのヒナ連れ程度であったが留鳥は勿論夏鳥のサンショウクイ・キビタキ・ヤブサメ・ツバメ、漂鳥のカワラヒナ・ウグイス・ミソサザイは県内調査でも繁殖が確認されており、当城山の森林環境はこれらの繁殖を可能に

していると考えられる。

5月、7月の調査で数が多く観察されたスズメ・ホオジロ・ヒヨドリ・ツバメなどは巣立ちしたヒナが含まれたものであろう。

基礎定線調査資料

調査地の区分	林 地					村 落				
区分毎の調査時間	1 8 0 分					6 0 分				
区分毎の距離	4 6 0 0 m					1 4 0 0 m				
生 息 数	1 回 目	2 回 目	3 回 目	4 回 目	5 回 目	1 回 目	2 回 目	3 回 目	4 回 目	5 回 目
	105	114	282	89	92	26	24	26	41	44
生 息 密 度	0.00046	0.00050	0.00122	0.00039	0.00040	0.00037	0.00034	0.00037	0.00059	0.00063

参考資料（越前町梅浦＝林地）

0.00051羽/m²（S . 50 . 5 . 18） 0.00199羽/m²（S . 53 . 11 . 15）

0.00092羽/m²（S . 53 . 12 . 17） 0.00076羽/m²（S . 54 . 1 . 3）

(2) 林相との関係

この地域は中腹以下は植林が進んでおり樹令の高い部分も多いが稜線部には樹冠の高い夏緑広葉樹林も広がっており極相林的性格を持った林帯やアカマツ・コナラ・クヌギの成木の混じる二次林も広がっており鳥類の生息環境としては優れている。

中・下層や林床には春から冬にかけて鳥類の食餌となる植物も随所に見ることができる。また夏緑広葉樹につく昆虫類の卵・幼虫・成虫も厳冬期を除いては豊富で繁殖の場所としても優れている。杉林においても林縁部ではホオジロ、大木林ではサンコウチョウ、水場ではミソサザイの繁殖適地と思われるところも数多くみられる。

また、杉の密林は降雨・強風・降雪時の逃避林として利用され、1月調査時には落葉樹林繁殖性のカラ類をこの杉林の中で多く観察記録されている。

60～70%を占める留鳥、15%に及ぶ夏鳥の多くと、11～16%の漂鳥の一部は繁殖するものと思われる。具体的にはトラツグミの餌運びやコゲラの新しい巣穴の確認をしている。

林床の抜けた杉林や隣り合う落葉高木林内ではヤマドリのヒナ連れやドラミングも聞かれ本種の繁殖生息に適していることを実証している。

(3) 地形との関係

鳥類の生息は多分に植生と関連するが地形や周囲の環境にも影響される。渡り鳥や大型のワ

シタカ類について言えることで、本地域はワシタカ類には当てはまらないが、冬鳥である孤独性のルリビタキ、群れをつくるマヒワが他の調査地に比し多く観察されたことは、冬鳥の渡りつき、或は中継点として選択されるのに適しているのではないかと考えられる。また、村落内の水面でカワガラスを見るのは、集落地ではあるが山村であることを物語っている。

(4) 村落内状況

戸数に比しズメは少ないと思われる。これは遺跡として水田耕作が中断された影響も大きいものと考えられる。トビ・カラスは小動物の死骸やゴミ漁りの清掃役をする仲間だが、数少なく清潔環境を思わせる。ツバメが入ってくるには谷深いためかこの数も少ない。

観光客の訪れも多い地区であるが、鳥相は鄙びた山村を思わせる。しかし水辺性のアオサギが一直線に谷奥に向かうのは上流の養鱒場をねらったことであろう。

9 おわりに

- (1) 記録は相当の値を求められて一応の成果は収められたが、予想するすべての種を記録することはできなかった。本調査地に対する調査は初めてであるので、第1回資料としての価値を有すると考えられる。
- (2) 移動性であり、囀鳴に頼ることなど多分に遭遇的であるために記録洩れも多く特に冬期調査においてそうである。
- (3) 現況森林における鳥相についてはさらに記録を集積して将来の環境変化の指標的な資料としたいものである。
- (4) 代表的な季節調査を実施し、それなりの実態を得たが、回数について充分とはいえない。
- (5) 遺跡探訪のレクリエーション1日コースとして四季を通じて価値あるコースと考えられ、道標の整備など探鳥コースとして自然に親しめるよう考慮したい。
- (6) 巣箱の架設、自然水場の整備などは鳥類生息の密度を高めるであろう。本地域はその要素を十分に備えている。
- (7) 遺跡周辺の調査を依頼されたが、遺跡の草原および八地山は除いた。八地山は杉などの針葉樹林であるため期待が持てなかったことと、城山に対面しているため類似しているだろうという判断によったためである。

本調査の機会を与えて頂いたことに深く謝意を表して報告書とする。

調査員

上 木 泰 男

門 前 孝 也

特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 XI

— 昭和54年度発掘調査整備事業概報 —

昭和55年3月31日

編集発行 福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所◎
印刷 創文堂印刷株式会社

無断転載を禁ず